

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 181, 2018

## VIEW 展望

ワインスタインと私たち／木下千花…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…3-4

支部・研究会だより 東部支部…4 クロスメディア研究会…5-13

アナログメディア研究会…14 映像テキスト分析研究会…14 アジア映画研究会…15

ドキュメンタリードラマ研究会…15 映画文献資料研究会…15 ヴィデオアート

研究会…21 映像表現研究会…16-17 関西支部…17 中部支部…18-20

ショートフィルム研究会…21 メディアアート研究会…22-23 西部支部…20

日本映像学会第44回大会第2通信…24

## FROM THE EDITORS

編集後記…24

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第181号」2018年1月1日発行  
 発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：奥野邦利（委員長）・橋本英治（副委員長）  
 前川修・李容旭・岡島尚志・板倉史明

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp  
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# ワインスタインと私たち

木下千花

ハリウッドとジェンダー、もしくはこのどちらかに少しでも関心のある会員にとって、ハーヴェイ・ワインスタイン問題はおなじみのトピックだろう。2017年10月5日付の『ニューヨーク・タイムズ』紙、10月10日付の『ニューヨーカー』誌に相次いで掲載された告発記事が引き金となって、<sup>1</sup> 大物プロデューサーであるワインスタインの長年のセクハラと組織的な隠蔽が明らかになり、自ら CEO を務める製作会社ワインスタイン・カンパニーを解雇されたばかりではなく、英国映画協会 (BFI) や映画芸術科学アカデミー (アカデミー) から除名され、フランス政府はレジオンドヌール勲章を剥奪するプロセスに入ったと報じられた。ミラマックスを創立し、『セックスと嘘とビデオテープ』や『バルブ・フィクション』を世に放って 1990 年代からゼロ年代にかけて「インディペンデント映画」の時代を築いた大立者の凋落には、アンジェリーナ・ジョリーやグウィネス・パルトロウなど誰もが知っているセレブが告発者として名を連ねたことも大きく作用した。告発者たちの語るワインスタインの手口は驚くほど似通っている。駆け出しの女優やモデルを「次の企画について話がある」とプライベートな密室でのミーティングに誘い、途中まで参加していた他のスタッフにはやがて席を外させ、バスロブに着替えて再登場してマッサージを要求する、というものだ。それからの展開には諸々のヴァリエーションがあるが、従わなかったり告発したりした女性には業界内で悪い噂を流すなど報復を行っていた。現在、ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドンの警察はレイプ容疑での捜査を進めている。

「ワインスタインの凋落」が一人のプロデューサーの問題に留まらず「ワインスタイン効果」と呼ばれるに至ったのは、セクハラ被害者による告発が映画メディア産業からあらゆる業界へと広がり、#MeToo のハッシュタグのもとに SNS を通じて広がった糾弾、告白、共感の波が、ジェンダー、セクシュアリティ、権力をめぐる社会の認識を根底から変えたからだ。なお、ワインスタイン効果を英語圏のいわゆるピューリタニズムやポリティカル・コレクトネスに帰するのはおすすめでできない。フランス語では #MeToo ならぬ #balancetonporc (豚野郎を晒せ) が拡散して喧々囂々の議論を巻き起こしている。そんななかでシネマテークがロマン・ポランスキーのレトロスペクティヴを挙行し 10 月 30 日には監督本人を招いたため、フェミニストによる激しい抗議行動が起こり、2018 年 1 月に予定されていたジャン＝クロード・ブリソーのレトロスペクティヴは無期延期となった。<sup>2</sup>

ワインスタイン事件とその効果については、もちろん、日本語でも紹介されてきた。町山智浩や真魚八重子はワインスタイン批判の立場から論評を行っているし、*Elle* 日本語版などでは新しい告発者が現れるたびに翻訳まとめ記事が現れる。最近になってライターのはあちゅうは #MeToo に背中を押されて電通勤務時代のセクハラ、パワハラを告発しており、ワインスタイン効果が太平洋のこちら側に波及する可能性も完全には排除できない。だが、ここ日本の地ではセクシズムと女嫌い (ミソジニー) がまかり通って社会通念を形成し、多くの女性にも内面化されている。レイプやセクハラ被害

を訴える者は「隙があった」「～は同意のサイン」、果ては「ハニートラップ」「枕営業」などと責められる。もっとも、日本だけではない。G 7 のなかで日本と並ぶマチズモの秘境であるイタリアでも、ワインスタインに対して勇気ある告発を行ったアーシア・アルジェント (ダリオ・アルジェントは父) に対する右派のバッシングは猖獗を極め、彼女はドイツ移住を決意したという。

英語・フランス語でワインスタイン効果についてのニュースを追っていると、ここで起こっている事態は凡百のセクハラ露見騒動とは本質的に異なるということがわかる。ワインスタインの行動自体には同情の余地もグレイゾーンもなく、矢野暢も顔負けの真っ黒なセクハラであって特に議論を要する点はない。それにもかかわらず「ワインスタイン後の世界では」としばしば言われるほどの地殻変動となったのは、ハラスメントやレイプを許容しときには涵養さえするミクロな権力構造と被害者の告発をあらかじめ封じる言説の布置に多くの論者が言及し、ハラスメント・レイプ文化がジェンダーとセクシュアリティの「制度」として認識され根底から問い直されたからだ。現在の日本において、セクハラをめぐる「常識」の多くがこの制度を形成し補強している。撮影所やテレビの現場ではセクハラ発言が挨拶代わりだったけど、出来る女はそんなことにはすぐ慣れてスキルを磨くものである。懇親会でお尻をさわられても、大人でプロフェッショナルな女性研究者は上手くあしらって事を荒立てない。大学院の指導教員に恋慕された場合、セクハラとして訴えても「問題児」として就職の道が断たれるから、だましだまし博士号を取るのが賢い対処法である。このような既存の制度の内部における強さや成熟や賢明さの顕揚は、過渡期を生きた私たちのような者にはサヴィヴァルのため必須だったのかも知れないが、その実、被害者を責める言説と紙一重であり、間違いなく制度そのものを継続させることに貢献している。

映像を研究しあるいは制作する私たちは、ある意味で特殊な世界にいる。画面上の人間の身体的特徴や性的魅力について同僚や学生とおおびらに語ることが職業の一部である分野はそれほど多くない。女優・監督のサラ・ポリーが述べるように、カメラの前の演技者は自らをさらし、ときに親密な行為を行い、脆弱性を引き寄せる。<sup>3</sup> そのような場が必要とされるのは、権力関係と幻想や欲望の制度性の認識に基づく折衝と信頼関係の構築であるだろう。「ワインスタイン後」の世界は明るい。

## 註

- 1 Jodi Kantor and Megan Twohey, "Harvey Weinstein Paid Off Sexual Harassment Accusers for Decades," *New York Times*, October 5, 2017, Ronan Farrow, "From Aggressive Overtures to Sexual Assault: Harvey Weinstein's Accusers Tell Their Stories," *The New Yorker*, October 23, 2017, <https://www.newyorker.com/news/news-desk/from-aggressive-overtures-to-sexual-assault-harvey-weinsteins-accusers-tell-their-stories>, last accessed December 24, 2017.
- 2 Isabelle Regnier, "Harcelement Sexuel: la Cinéma-thèque française ajourne la rétrospective Brisseau," *Le Monde*, November 9, 2017.
- 3 Sarah Polley, "The Men You Meet Making Movies," *New York Times*, October 14, 2017.

(きのした ちか／関西支部、京都大学大学院人間・環境学研究所)

## 総務委員会

奥野 邦利・橋本 英治

### 報告と計画について

総務委員会では、第3回、第4回委員会が以下のように開催されました。ここでは委員会報告とその後の対応についても併せて報告します。

#### 第3回総務委員会

日時 2017年10月14日(土曜日)13時～14時45分  
 場所 早稲田大学戸山キャンパス 31号館105教室(31号館1階)  
 出席：奥野邦利、橋本英治、李容旭  
 ※オブザーバー出席 武田潔、遠藤賢治  
 議案と討議された内容は以下のとおり。

#### 1) 第43回大会の報告

これについては、前川修委員及び板倉史明委員が校務等により欠席でしたが、会報180号による大会報告と併せて、両委員より文書による大会実施改善案が示されました。特に大会での研究会開催について、一定のルールが必要とのこと。

#### 2) 第44回大会の準備状況

李容旭委員より現状の報告があり、会報180号(前号)にて第一通信のお知らせ済み。2月までには第二通信を発送予定。

#### 3) 財務状況の確認と見直しについて

2017年4月～7月の予算執行状況を報告しました。収入の部では予定している新入会員がやや少なく懸念されますが、支出の部とのバランスは概ね取れていることを確認。

#### 4) 第23期役員選挙に関する件

第22期役員選挙規定をもとに内容の確認を行い、理事会に向けては第23期についても規定内容に変更予定はなく、次回12月の理事会では選挙管理委員会メンバーの選任及び理事会上程を行うことを確認。

#### 5) 会報に関する件

大会報告号ということで校正作業等に時間が掛かり、第180号(前号)についてはPDF版を先行公開し、ペーパー版発行が2週間ほど遅れたことを確認しました。大会発表者からの報告原稿到着に遅れが目立ったことについては、追って原稿を要求した旨を理事会へ報告。また、WEB版への投稿原稿を推進する方針に基づき、会報投稿規定(会員によるHPからの投稿)を理事会に上程し、承認されました。

#### 6) 学会事務担当者募集要領について

これについては、学会事務担当者の募集要領を理事会に上程し、正副会長、正副総務委員長、研究企画委員長、機関誌編集委員長による人事小委員会の審査を経て、理事会へ最終候補者を上程する方針を確認。

#### 7) その他、学会運営上の課題確認と検討

学会ホームページ用サーバーレンタルについて、学会財務への負担軽減を目的に、現在の利用状況に合わせたものへの縮小を理事会へ上程し、承認されました。

#### 第4回総務委員会

日時 2017年12月16日(土曜日)13時30分～14時45分  
 場所 早稲田大学戸山キャンパス 第10会議室(33号館16階)  
 出席：奥野邦利、岡島尚志、李容旭  
 ※オブザーバー出席 武田潔、遠藤賢治  
 議案と討議された内容は以下のとおり。

#### 1) 学会名義使用に関する件

「東京アニメアワードフェスティバル2018」より後援名義使用の承認申請があり、映像学会員による運営面での活動状況を確認した上で、理事会へ上程し、承認されました。

#### 2) 第44回大会の準備状況

李容旭委員より、実行委員会として会場の確認及び、運営方針についての報告がありました。今後の運行スケジュールについては、総務とも協

議の上進めることと併せて、第二通信の発行、研究企画委員会による大会発表の事前審査についても確認を行いました。

#### 3) 会報(第181号)に関する件

今号は橋本英治副委員長を編集担当として1月初旬の発行を予定。なお、原稿締切りは12月20日となっており、編集作業中であることを報告。また、会報については、次期理事会への申し送りも含めて、発行回数や発行時期についての検討を予定。

#### 4) 財務状況の確認と見直しについて

2017年8月～11月の予算執行状況を報告しました。収入の部では依然として予定している新入会員がやや少なくはありますが、会費入金の状況は予算通りに推移しており、支出の部とのバランスは概ね取れていることを確認。

#### 5) 第23期役員選挙に関する件

第23期役員選挙規定を理事会へ上程し、内容の確認を行いました。なお、選挙管理委員会委員は、遠藤賢治、奥野邦利、上倉泉、木原圭翔、高山隆一、鳥山正晴、野村建太、水由章の8名の会員を推挙し、理事会にて承認されました。

#### 6) 学会事務担当者選考について

これについては、前回理事会で承認された学会事務担当者の募集要領に基づき書類審査(一次審査)と面接審査(二次審査)を経て、佐藤由紀理事より推挙された尾山由佳氏を最終候補者として理事会へ上程し、承認されました。

#### 7) その他、学会運営上の課題確認と検討

次年度予算案を組む上で、会員名簿発行の有無を検討事項として上げました。今般の社会状況や学会財務の健全化及び学会ホームページ活用などの観点から総合的な判断を行いたい旨を理事会でも提案しました。

以上

(おくのくにとし/総務委員長・日本大学芸術学部  
 はしもと えいじ/総務副委員長・神戸芸術工科大学)

## 研究企画委員会

鳥山 正晴

#### 1) 研究企画委員会開催

研究企画委員会が下記の日時に開催されました。  
 ・10月14日(土)  
 主に、秋期研究会登録申請について話し合いました。  
 ・12月16日(土)  
 主に、研究活動費助成について話し合いました。

#### 2) 新研究会

下記の二つの研究会が新しく発足しました。  
 ・アジア映画研究会(所属支部 東部支部)  
 代表 石坂健治会員 構成員 村山匡一郎会員、金子遊会員  
 ・写真研究会(所属支部 東部支部)  
 代表 前川修会員 構成員 倉石信乃会員、小池隆太会員

#### 3) 2018年度春期 新規(変更を含む)研究会登録申請について

締め切り：2018年4月30日(月)

記入票(研究会登録申請書.xlsx)を学会ホームページ(<http://jasias.jp/archives/4010>)よりダウンロードし、別紙資料とともに郵送、あるいは電子メール(送信先アドレス:jasias@nihon-u.ac.jp)にて、映像学会事務局・支部宛(登録を希望する支部)に登録申請を行なっ

## 支部・研究会だより 東部支部

鳥山 正晴

さい。尚、既存の研究会にいても、変更がある場合にも、申請の手順に従って提出をお願いいたします。

映像学会研究会の新規発足については以下のガイドラインに基づいてお考えください。

### <ガイドライン>

- \*映像学会の研究会活動であるということをよく認識したうえで、研究テーマに普遍性、広がりがあること。
- \*研究会の運営が特定の個人に偏りすぎず、多くの会員の参加と交流が見込まれること。
- \*研究会の継続性が担保されるよう運営委員のバランスを考慮したものであること。
- \*事前に研究会活動に準じたような実績がない場合には、研究テーマが想定する専門性や業績を持った会員が運営構成員に含まれていること。

### <その他>

- \*研究会の登録申請は代表者の所属する支部、または所属する研究員が多数を占める支部に登録申請をおこなってください。なお、研究会内にさらに支部会などを組織する場合は、必要に応じて各研究会内部で調整をおこなってください。
- \*申請書にある代表及び運営構成員とは別に、過去の研究活動への参加者も併せて、参加を予定している会員リストも添付してください。なお、運営構成員に会費納付の遅滞がないことを確認してください。
- \*申請された研究会の当該テーマにおける研究活動（勉強会や準備会など）を1年以上、複数回実施されていることを別紙資料として提出してください。
- \*研究会に配分される活動費は登録する支部予算の中から支給される場合もあります（各支部の裁量となります）。
- \*研究会承認後過去2年間以上にわたり実質的な研究会活動が見られない研究会は、研究活動に対する休止の正当な理由、存続の必然性の有無、研究会を構成する会員の意欲および、今後の研究活動の継続への意思などが問われます。
- \*研究活動の休止の理由などについて十分な説得力が得られない場合には、研究企画委員会・理事会の審議を経て本学会が公認する研究会としての承認が得られない場合があります。尚、その対象となった研究会は、2年間同一の会員が主宰する同名の研究会として申請することができなくなります（以上、2015年5月31日の理事会の承認事項）。

- \*「研究会登録申請書」の記入内容については記入票（研究会登録申請書.xlsx / URL <http://jasias.jp/wp-content/uploads/2018/01/StudyGroupApplicationForm2018New.xlsx>）をご確認ください。

以上

日本映像学会研究企画委員会  
〒176-8525  
東京都練馬区旭丘2-42-1  
日本大学芸術学部内

### 4) 2018年度研究活動費助成の公募発表の延期について

通常、1月1日発行の会報で助成金の総額の予定額を提示し、2月～3月に公募しておりました。しかし、今回は来年度の予算で一部はつきりしない部分があるため、予算措置が遅れ、助成金の予定額がまだ提示できないとの旨が総務委員会よりありました。

そのため、この会報での公募は申し訳ありませんができません。会員の皆様には、年明けの2月初旬にメールにて公募要項、および助成金の総額の予定額をお示しする予定しております。

2月初旬に公募要項が発表できる運びとなりましたら、公募の期間は、従来通り3月末日を考慮しておりますが、公募要項の発表の時期が遅れる場合には、それに鑑み、公募期間の締め切りを延ばします。

会員の皆様にはご迷惑をおかけしますが、何卒よろしく願います。

以上

(とりやま まさはる / 研究企画委員長、日本大学芸術学部)

東部支部に研究会活動は活発に行われ、以下のような勉強会、イベントが開催されました。

### ・アナログメディア研究会

協力事業「はらっぱ祭り 映像インスタレーション& W.S.」

- ① 10月7日(土) 14時から18時 小金井市中町天神前集会所
- ② 10月21日(土) 10時から19時位まで 小金井市中町天神前集会所
- ③ 10月28日(土) 14時から18時 小金井市民公民館貫井北分館
- ④ 11月4日(土)、5日(日) 武蔵野公園

### ・映像表現研究会

「インターリンク：学生映像作品展 [ISMIE]2017

- ① 京都会場 11月17日(金)～19日(日)、Lumen Galleryにて開催される「KINO-VISION 2017」にて
- ② 名古屋会場は11月21日(火)～26日(日)に開催される「第22回アートフィルム・フェスティバル」にて
- ③ 東京会場は12月9日(土)、12月10日(日)、日本大学芸術学部江古田校舎大ホール

### ・第11回クロスメディア研究会

開催日時：2017年11月26日(日) 14:00-18:40

場所：大妻女子大学千代田キャンパス

発表：「めのはなしー右側にも左側にも気をつけろー」

万城目 純 (映像研究 / 実践、ゲスト)

「日本文化の発祥と伝播・変容に関する一考察

ー大和民族ユダヤ人説の謎についてー

渡部 英雄 (湘南工科大学、会員)

「国策から見る韓国保育の中の伝統音楽ー幼保一体型「ヌリ課程」と韓国国立国楽院の事業を中心にー」

山本 華子 (大妻女子大学、洗足学園音楽大学非常勤講師、ゲスト)

「太平洋戦争後に作られた日本の童謡・唱歌について」

斎藤 恵 (大妻女子大学、会員)

「日本の近代建築における部分保存の可能性について」

小森 俊明 (作曲家、ゲスト)

「日本で活躍した外地出身のマンガ家」

牛田 あや美 (京都造形芸術大学、会員)

「スポーツ系大学におけるメディアスポーツ関連科目の編成」

柴岡 信一郎 (日本ウェルネススポーツ大学、会員)

「美術研究の再検討ー皆本二三江を中心にー」

宮田 徹也 (嵯峨美術大学各員教授、会員)

「音楽ビジネスの課題と展望：「間・共創成」に向けて」

河合 明 (河合孝治、芸術メディア研究会、会員)

### ・アジア映画研究会 (第1回)

日時：12月6日(水) 18:00-20:00

場所：国際交流基金・御苑前オフィス7階アジアセンター

発表1：「黄色い葉の精霊ー遊動民ムラブリ族の映像による表象」

発表者：金子遊 (会員) 45分+討議

発表2：「アフリカ映画の歴史あるいはアイデンティティ」

発表者：杉原賢彦 (ゲスト) 45分+討議

以上

(とりやま まさはる / 東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部)

## クロスメディア研究会

李 容旭

第11回クロスメディア研究会の研究発表を下記のごとく開催しました。

開催日時：2017年11月26日(日) 14:00-18:40

開催場所：大妻女子大学千代田キャンパス E棟7階 E753室

〒102-8357 東京都千代田区三番町1-2



以下研究発表のタイトル、発表者、概要です。

「めのはなし—右側にも左側にも気をつけろ—」

万城目 純 (ゲスト発表、映像研究/実践)

眼についての話。まずは、網膜に映る映像を自明の理として考えない。映像の専門家であるが故に見落としているもの。自身が一番違いメディアであるが故に死角となり続けるもの。まさしく視覚の死角をめぐる話。かつてスポーツタイムの達人であったジャック・タチはボクサーの死角を『左側に気をつけろ』(注1)と叫んだが、ゴダールはいや、本編こそ真向から批評すべき『右側に気をつけろ』(注2)と1989年に返歌を送った。そして21世紀になり、どちらもこの眼について、更に深堀の話が必要と考える(注3)。かつてバタイユの著作を『眼球譚』(注4)と重々しく呼んだ時代もあるが、新訳では簡単明瞭に『目玉の話』(注5)と代わってきている。しっかりとした形のあるレンズより、むしろアンフラマンズ(注6)な網膜に、その糸口は残されているような気がする。こうしたものを自らに起こった出来事の検証をふくめた「めのはなし」という論をすすめていくことにする。

### ■目の構造

目の構造をカメラに例えるなら、レンズは「角膜」や「水晶体」であり、「虹彩」が絞りの役目を果たし、レンズの中心部である「瞳孔」から光が入力される。目玉の中心は「硝子体」と呼ばれるもので、それは三層の膜で覆われている。外側から「強膜」「脈絡膜」「網膜」などと呼ばれる。

この一番内側にある薄い膜が「網膜」。この網膜のちょうど瞳孔から差し込んだ光がまっすぐ当たる中心部、映画でいえばスクリーンに相当するエリアを「黄斑(部)」と呼ぶ。さらにそのスクリーンの中心部の凹んだ部分を「中心窩」と呼ぶ。このスクリーンに映った映像データが、ここから「視神経乳頭」を経由して脳に転送される。この神経系を「視神経」ともいう。

網膜には、細かい血管も当然ながら存在し、「網膜中心動脈」と「網膜中心静脈」と呼ばれる2種の血管が交差しながらこの「視神経」とともに眼球の裏側に伸びている。

### ■3種の疾患名

網膜に関する主な疾患の中では、この障害が起きた部位によって名前が違う。網膜の中心部、「黄斑」に起こる疾患は主に加齢が原因でその変性が起こることから「加齢性黄斑変性(症)」と呼ばれる。

残りの2種の疾患に関しては、網膜の静脈が何らかの原因で障害を受けることから「網膜静脈閉塞症(RVO)」と呼ばれる。この「網膜静脈閉塞症(RVO)」はその閉塞が起きた部位によって、さらに二つに分類される。ひとつが目玉の脳につながる視神経内で起きた場合を「網膜中心静脈閉塞症(CRVO)」。その手前の網膜で閉塞が起きた場合を「網膜(性)静脈分枝閉塞症(BRVO)」と呼ぶ。

### ■網膜への来訪者

突然の来訪者に気が付いたのは、2014年の11月後半のことであった。明確な時刻は実は判明しているのだが、ここではあまり触れずに、この来訪者について話を進めていこう。その夜、彼は右の網膜に出現した。はじめは多少のアルコールを摂取しながら、ある企画についての原稿を送り終わった直後だったので、疲れ目かと思って就眠した。ところが翌日目が覚めても、昼間に仕事をしていても、その訪問者の影が取れない。

それは、夜にはぼんやりしてあまり知覚できなかったが、光がさす日中では明確に影として認識できた。彼は右目の左下部分、おおよそ視野の約4分の一部分に達していて、眼球の中心部すれすれまで達していた。その影は濃淡が微妙にあって、まるで小さな人がこちらを覗き込んでいる形に見える。

職場について空き時間を見つけて、目の検査表をネットで検索し、片目ずつ比較検討をしてみた。結果、出てきた答えが先の「網膜(性)静脈分枝閉塞症(BRVO)」であった。

その後、かかり付けの医師から専門病院に紹介状をもらい、眼底検査を受けることに。眼底検査には造影剤を使用するものも受け、ネットの検査結果の症状であることが実証された。

### ■目の不思議

ここでは、細かい症状や経過について述べては要点をまとめていくことにする。

実際に見えない部分は右目の左下4分の一。つまり顔の内側、鼻側側面部分だが、実際の静脈が閉塞している部分は、右上の上4分の一、つまり右耳側である。ここで思い出していただきたいのは、網膜がスクリーンと例えられることだ。つまり実際、網膜に映っている映像は上下左右反転しているのだ。その上下左右あべこべの映像が脳に送られ、修正され、私たちはそれを真実の映像をとして認識しているのだ。

脳はつねにこんな作業を逐次行っている。私たちは自明の理として、あたかも世界がこんなものだという脳が修正した映像を何の疑問もなく受け入れている。

まさしく、こんなことがわが身に起こった2014年の12月にみた映画が前述した、ジャン＝リュック・ゴダール監督の初3D映画『さらば愛の言葉よ』であった。左右で通常の3D映画ではミスとされる視差の使用や、全く違う映像が進行する等、様々な映像の実験が果敢になされている問題作。自身の問題として「犬の視点」と標ぼうする監督の目論見に、映画を見ている時間のみならず、日常でずれた3D映画を鑑賞できる映像作家として日夜実践できる幸福感に浸ったことを記しておこう。

### ■その後の経過

その後に治療は承認されて間もない、抗VEGF(血管内皮増殖因子)注射を、2014年のクリスマスから翌年の4月8日の花まつりまで計3回うけ、その後定期的な検査を受け現在にいたる。

この治療法は、血管が閉塞し、そのままではいわばびしょびしょに漏れた状態では不正な血管が新しく成長していくと、ますます影が育ってしまうので、それを止める薬剤を使用する。これは、機能的には、もともと抗ガン剤として開発されたもので、この新生血管の増殖を抑制する。この薬剤を眼球の部位に、ごくごく少量、注射で投与するもので、最短一か月の間をおかなくてはならない。

その後、詳しい経過には触れないが、この3回の投与の効果があり、画像的にもいわゆる腫脹はひとまず、正常近くに収まった。とはいえ、一度障害を受けた網膜はもとに戻らない。最近ではPS細胞での可能性が研究されているが、まだ実際には実用化されていない。ゆえに自分と自身を覗く影の来訪者との面談は継続している。

## ■効き目の話

ところが、当初はことあるごとに違和感があった右目の映像の欠損部分が、徐々に薄れていった。これは実際にはスクリーンに映っていない映像が脳内で「こんなもんじゃないか?」と補ってトータルな映像を作り上げている結果だと推測される。当初は、右目と左目があきらかに違う映像をみているゴダールの3D映画の状態から。ほぼ安定した左右の違和感のない立体画像が脳内にイメージされている。このことに気が付いたのは2015年から2016年の2年間。慣れというか脳のトレーニングの方法も効いたのかもしれない。

今年に入り、5月。あることが起こった。これは自分では十分予測していたことなのだが、自身ではその変化に徐々に気が付いていた。定期検査による、その後の視力や視野の検査では、実は数字上ほとんど変わっていないらしい。簡単に言えば、出血による腫れはひいたものの、あとの見え方は良くもなっていないし、悪くもなっていない。まあ、これは治療上の効果が出て、症状からみて現状維持という良好な診断であるが、実は大きく変わったことがある。それは「見え方」の問題である。

自身が患ったのは右目であるが、これは効き目であった。このため現在でも影の来訪者が常にいるため右目ではアナログ式カメラの右側にあるファンダーも覗けないし、望遠鏡やドアの防犯用のレンズも覗けないし、得意だったダーツも全く点数が上がらない。

ところが、効き目がシフトチェンジしたのだ。現在では、効き目テストをすると完全に効き目が左になっている。担当医に話すと、あまりそんな症例は聞いたことがないようだ。自分なりに推測するに最近使っているカメラはデジタルの左モニターのタイプがほとんど。右のファンダーは除いたところで4分の一は見えないので使えものにならない。

## ■結論と課題

医学的には効き目のシフトチェンジは数値化が行われていないのか?しかし、体験段では経験がある、自身でも腱鞘炎にかかった時にマウスを右手から左手に変えてみたら、これが却って操作が早くなったこともある。最近では「脳トレ」や「脳の地図」などの研究も臨床分野から発言されている。

また脳の中の映像についても、体験的に欠損した映像を補う能力は、逐次休みがないためか?脳が他のタスクに一杯いっぱいになっていたりすると間に合わない。また、血流が悪くなったりして、空腹や視覚を多雨回過ぎると調子が悪い。パソコンが能力以上の画像処理できなくなると時間がかかったり、フリーズしたりするのと、とても似ている。

この他にも身体表現と身体研究の見地から、視覚の左右のバランスと身体の関係など、まだまだ、これから研究を深めることは自らに起こった事柄より導き出せそうだ。また、この研究を実践として表現として展開していく方法もあると考えている(注7)。今回は、その発端の発症からちょうど3年のひとまずの報告として発表します。

注1) 制作1936年。ルネ・クレマン監督作品。ジャック・タチ主演。

注2) 制作1987年。日本公開1989年1月28日。ジャン＝リュック・ゴダール監督。

注3) 『さらば愛の言葉よ』制作2014年。ジャン＝リュック・ゴダール監督の初3D映画。左右で通常の3D映画ではミスとされる視差の使用や、全く違う映像が進行する等、様々な映像の実験が果敢になされている。

注4) がんきゅうたん。原題: Histoire de l'œil。1928年にジョルジュ・バタイユがオーシュ卿のペンネームで発表した処女小説、およびそれを大幅に改稿して、1947年に発表した小説。邦訳は生田耕作。

注5) 『目玉の話』。『眼球譚』の中条省平による新訳、光文社古典新訳文庫。2006年。

注6) 「下の、下方の」という意味の接頭辞「infra-」と、「薄い」という意味の形容詞「mince」を組み合わせたM・デュシャンの造語で、「極薄」「超薄」なども訳される形容詞。

注7) フィルムメディアでの作品の再挑戦。ノールック撮影など現在、研究中。

(まんじょうめ じゅん/映像研究/実践)

## 「美術研究の再検討—皆本二三江を中心に—」

宮田 徹也 (会員、嵯峨美術大学客員教授)

美術教育者の皆本二三江(みなもと・ふみえ/1926-)は、人間は幼児期から男女に絵を描く差があることを突き止め、大人になっても性別によって絵に対する見解が異なることを研究した。美術を考える上で不可欠なのは皆本のように、人間として発生した時の姿の探求と、社会の一部であることの自覚、他の芸術分野や研究動向との融和であろう。近代に誕生した美学、美術史、批評はこれから時代に即した姿に変容を遂げなければならぬ。このような大きな問題を紐解く前に、本稿ではまず今日の学術研究の背景を明らかにし、皆本の研究の主張、方法、特徴を考察し、皆本の研究から導き出される考察と可能性を探求する。

### 1. 今日の研究背景

古代に生まれ近代に育まれた人文/自然科学研究は、今日に至っては分業方法が形骸化され、専門に特化した横断不可能な状況が続いている。この専門性は更に強化され、絶対的な権威化が進んでいる。

### 2. 皆本の研究の主張

①価値の多様性。「私達はしばしば「男とか女である前に人間である」という言葉に出会う。だが人は人間一般として生まれるのではなく、男または女として生まれる。人間一般になるのは至難なことなのである」【1993/281頁】。

②男女の作品の差異。「男女の絵のちがいの一端は、なんと、一歳前後にあらわれ(32頁)、男の子が描くのは主にロボットや電車、トラックなどの「人工物」という「男性の仕事」であり(161頁)、女の子が描く理想的な楽園に登場する「自然」は「人類の生存にいちばん必要な条件」(167頁)である」【2017】。

③線と色。「男の人は形にとらわれていて、線描で十分満足できるようです。ある保育園の年長クラスで、形が描けたあとは彩色してもなくてもどちらでもいいよ、と言ったところ、男の子の多くは線描だけで彩色せずに終えてしまったくらいです。／そう考えると、女の子のぬり絵好きも理解しやすいのではないのでしょうか。四歳半頃、いくつかのモチーフらしきものが描けるようになると、多くの少女は輪郭線の内側を彩色して色の面をつくりはじめます。そして何度も色を取り替えながらたくさん色を使います。輪郭線は彩色をするための境界線で、完成時には消えてもよいもので、小学生の頃には後に残らないよう白で下書き

する女の子もいます。そして輪郭線の内側に均一に色をぬり込めていくのです【2004/96頁】。

④無理解。「知人の幼ない男の子が、苦心して小さな木片で刀をつくり、得意げに母親に見せたところ、母親は驚愕し即座に「こんなものをつくってはいけません」と叱りました。そのとき男の子は、自分の全存在を否定されたような、悲痛な表情をしたということです。男の子にとって、生きることと戦うことは表裏一体のものなのです。この性質は生まれつきのもので、母親や大人たちに「強くなれ」と教えられたためではないようです。ふつうの母親は、男の子の武器づくりを喜んで支持したりはしないものです」「ある美術教育書では女の子の構図をとりあげ、「人と花と家がおなじおもさで、ただならんでいるというやりかた」は創造的でないから、「興味の中心をつっこんでかき」「そこだけがわしくなったり、拡大したりするような表現のやりかたにすむように」指導しなさいと教示しています。指導者の示唆する表現は、幼児期の男の子に自然に出現するものです。つまりこの著者は、男性好みの美意識を女の子に求めているのです。こういう指導姿勢は、ほとんどの男性教師に共通しています。女性の異質の美意識の存在を知らないのですから、いたしかたない現状と言うべきでありましょう【1986/58、106頁】。

### 3. 皆本の研究の方法

調査。「本論文に掲載した女兒の楽園画は日本、中華人民共和国、台湾、ケニアの自由画であるが、筆者が所有する他の国々女児画も含め、何れもどの国の子供の絵であるか判断が困難なほど類似している【1993/285頁】。

分析。「男児と女児の造形活動と表現の差異について調査・分析を重ね、これまでに、モチーフ、色彩、構図、装飾、などの表現要素ごとに詳細な研究報告を行なった。その結果、造形活動にあらわれる男女の差異の実態を数多く発見した。また可成りの程度、差異の系統性とその根源に在るものが見えてきた。そこで本論文は従来の表現要素ごとの差異研究を総合し、新たな視座として、人間の活動の根幹にかかわる「価値観と表現活動」の差異の関係について考察をすすめる【1993/281頁】。

思想。「有性生殖を行う生物が雄雌で異なるのは当然のことで、雄雌は異なる性質を有効に使い補完しあって種の存続を有利に導く、と考えられている。現代の生物学は生物生存の目的を「自己の種の存続」にあるとするが、人類もこの最終目的から解放されてはいない。いま生存する私達はこの原則に従った人類の子孫である。造形活動に現れる男女の異なる価値観は、種の存続にむけて男女が分担し合う役割と密接に関連する【1993/281頁】。

マンガとの類似。「小学生の戦争画は、幼児期に比べ減少します。幼児画の戦争場面は、おもにマンガのヒーローたちの戦いであり、戦士たちはおおむね人造人間ですが、小学生では人間同士の戦いもかかれます。」「男性画と対照的な「絵そらごと」を描出する表現世界に、少女マンガがあります。(中略・引用者)それはつまり女の子たちが、そうした少女マンガの様式に十分に共感したことを示します。あの超現実的な巨大な星目は、女の子の美意識が選択したある時代の流行のスタイルです。【1986/55、69頁】。

《源氏物語絵巻》と女性画の研究【1986】【2004】。

進化論の導入。人類とチンパンジーの共通の祖先であるプロコンスルと幼児が描く頭足人の類似【2017】。

### 4. 皆本の研究の特徴

美術史、美学、教育学に留まらない。フェミニズムに陥らない。生物学全般、脳性分化研究(新井康充)、文化人類学(原忠彦)、仏教学(若麻績敏隆)、比較宗教学(M・エリアーデ)、心理学(M・ヤコービ)【1993】、進化論(プロコンスルと初期猿人の骨格分析)、生物学(E・ヘッケル)、

発生学(三木成夫)【2017】等、研究分野を横断する。

### 5. 皆本の研究の評価

人類の発生から現代という時間、日本からアフリカまでという場所、領域の横断という研究から実証性があるにもかかわらず軽んじられている。

### 6. 皆本の研究から導き出される考察

A.2 ②皆本は男性の破壊願望を戦争にまで拡大して考察している【1986】。破壊的な映画、《スーパーマン》《トランスフォーマー》《スパイダーマン》などは、赤と青という単色の組み合わせで、この組み合わせもまた、男児が好む色合いである。この事実から何が引き出されるか。どのように美術作品研究と連鎖させることが可能か。

B.2 ③男児は無機質で単色な線を、女児は有機的で多彩な色を好むことを前提にすると、特にヴィジュアルデザインとの関連が浮かび上がる。多彩なポスターを連想すると、デザインというより広告、消費との関連を考察する必要も生じてくる。すると、女性と消費も問題となっていく。女性と消費の関連性はダニエル・ベル『資本主義の文化的矛盾』(1976年/林雄二郎訳/講談社学術文庫(上)(中)(下)/1976-77年)などの先行研究がある。

C.2 ④皆本は親や教育者の子供の絵の無理解についても指摘しているが、私はここから人類の原初の活動として描くことが主体である場合と、人間の文明として見られることが前提である場面という、二つの絵画があるのではないかと問題を引き出すことができた。人類の原初活動としての描きに文明としての常識を押し付けると、皆本が危惧するような状態に陥り易い。1915年当初のダダ、バウハウス、ロシア構成主義からはじまる現代芸術は逆に、文明の常識に反撥して人類の原初活動としての作品を世間に投げかけ、受け入れられた。しかしこのような現代芸術は、今日の「新世界秩序」の時代にあって瀕死の状態である。人類は今、正に変わろうとしている。「新世界秩序」の思想とは1991年のブッシュ大統領の正月の演説で現れ、2001年のアメリカ同時多発テロによって力を強めた、アメリカが世界の警察になろうとしている同行を指している(藤原一編『テロ後 世界はどう変わったか』2002年/岩波新書)。H・アレント(1906-75)は『政治の約束』(2005年/高橋勇夫訳/筑摩書房/2008年)の中で、既にこの世界を予言している。「現代の政治に対する私たちの偏見の底には希望と恐怖が横たわっている。すなわち人類(ヒューマニティ)が政治と今や政治の思い通りになる暴力(フォース)手段によって、自らを滅ぼすかもしれない恐怖と、その恐怖につながっているのだが、人類は正気に返って世界から政治—人類ではなく—を一掃してしまうだろうという希望のことである。政治を一掃しうるのはある種の世界政府だろう。それは国家を行政機構に変えて政治紛争を官僚的に解決し、軍隊を警察部隊(police forces)に切り替えるだろう。もし政治をありきたりに定義して支配者と被支配者の関係とするなら、もちろんこの希望はまったくの夢物語である。そうした観点で言えば、私たちが最後に手にするのは政治の廃棄ではなく、膨大な範囲の独裁主義(ディスポイズム)になるだろうし、そのもとでは、支配者と被支配者を分かち溝はとてつもなく深く、被支配者が支配者を制御する形態など何一つとして考えられないだけではなく、いかなる種類の反逆ももはや不可能になるだろう」(128頁)。このような時代をどのように生きていくべきか。

### 7. 皆本の研究の可能性

その答を、皆本の2①の発想と、アレントの指摘から探ることができる。「神は人間を創造したのではなく「神は男と女を創造した」と語る『創世記』の言葉に示されている人間の複数性は、政治的領域を構成するも

のだ。(中略・引用者) 人間それ自体などという代物は存在せず、絶対的差異性において同一 (the same) である、すなわち人間的である、男と女しか存在しないのだ(90頁)。にも関わらず、「私たちは、人間(ヒューマン・ビーイング)を生み出す代わりに、自分自身の姿に似せて人間一般(マン)を創り出そうとするのである」(124頁)。人間一般など存在しない。人間は男と女の差異を見出すことによって、年齢、人種、生活、地域、生活、習慣等、同じ人間など存在しないことを理解する。つまり皆本の発想は、人が生きる根拠を掴んでいるのである。アレントは「人間と人間の間空間」にこそ「あらゆる人間的事象が営まれる」(138頁)ことを指摘する。そして「政治の目的は「人間」というよりも、人間と人間の間を生起して人間を越えて持続する「世界」」(207頁)であることに希望を見出す。

アレントは『全体主義の起原』(1951-68年/大久保和郎・大島かおり訳/みすず書房/1974年)の最後でも「始まりとは実は一人々々の人間なのだ」(3巻/324頁)ということも明記する。

皆本の思想は、ジェンダーや教育学、美術史という学問=社会的常識や定型に陥ることはない。我々は第二次世界大戦の惨状によって、既存の学問に対して疑問を投げかけなければならない。社会ではなく、人間、個人の発生に目を投げかけなければならない。個々の差異を認めなければならない。そこから未来が生まれるのである。

## 皆本二三江

略歴：武蔵野大学名誉教授。東京芸術大学美術学部工芸科漆芸専攻卒業、同専攻科修了。美術教育の立場から造形表現における男女の性差を研究。

著作：『「お絵かき」の想像力』(春秋社/2017年)  
『だれが源氏物語絵巻を描いたのか』(草思社/2004年)  
『0歳からの絵画制作・造形』(編著/文化書房博文社/1991年)  
『絵が語る男女の性差』(東京書籍/1986年)  
『0歳からの表現・造形』(編著/文化書房博文社/1982年)

共著：『おいつめられる男の子どっちつかずの女の子』(文化書房博文社/2001年11月)  
『Sex differences in Children's Free Drawings』(『Hormones and Behavior』40) 2001年9月  
『道具の扱ひの性差にみる幼児の造形活動の基本的性質について』(『武蔵野女子大学短期大学部幼児教育研究収録 第18集』武蔵野女子大学短期大学部幼児教育科/1996年3月)  
『幼児の色彩表現における造形教育論的考察—造形表現の性差に関する研究』(『武蔵野女子大学紀要 第14号』武蔵野女子大学/1979年3月)

論文：『幼児画の発達に関する一考察』(小原秀雄編『生命・生活から人間を考える』第13章/学文社/2006年11月)  
『世界の子どもの太陽色』(『色彩教育』Vol.25 NO.1.2/色彩教育研究会/2006年3月)  
『なぐり描き期の『女絵』』(『幼児造形教育研究会30周年記念大会 大会誌』/2004年8月)  
『幼児の絵画表現の発達過程における頭(胴)足人の位置付け』(『日本保育学会 第50回大会研究論文集』日本保育学会/1997年5月)  
『幼児の表現活動に必要な性差への配慮(2)』(『日本保育学会 第48回大会研究論文集』日本保育学会/1995年5月)  
『芸術をとおして男を考える』(『アンドロロジー・男性学』メトロポリタン出版社/1994年10月)  
『男の美意識』(幼児造形教育研究会20周年記念誌プロジェクト編『新時代の保育と造形表現』/1994年8月)  
『幼児の造形活動に表出する価値観』(『大学美術教育学会誌26別冊』大学美術教育学会/1994年3月)  
『幼児の絵における男女のちがひ』(『驚異の小宇宙・人体2脳と心』NHK出版/1994年2月)  
『幼児の表現活動に必要な性差への配慮について』(『日本保育学会 第46回大会研究論文集』日本保育学会/1993年5月)  
『1.2歳児の描画にあらわれる使用色の性差傾向について』(『武蔵野女子大学短期大学部幼児教育研究 第15集』武蔵野女子大学短期大学部幼児教育科/1993年3月)  
『女性画の系譜(5)』(真鍋一男退官記念論集刊行会『現代造形・美術教育の展望』新曜社/1992年9月)

『造形活動と造形能力の性差』(『造形教育事典』建帛社/1991年10月)  
『絵画に現れる性差』(家族画研究会編『臨床描画研究 Annex 3』金剛出版/1991年3月)  
『保育講座24女の子の才能を育てよう』(『教育美術3月号』(財)教育美術振興会/1990年3月)  
『造形表現にあらわれる性差』(『現代造形美術実践指導全集』全15巻中の第4巻/日本教育図書センター/1988年3月)  
『こどもの造形と性差』(『実践の視点』札幌市教育研究所/1986年11月)  
『図式期自由画における性差』(造形教育センター編『造形教育の理念』サクラクレパス出版部/1985年8月)  
『造形への出発』(『幼児の造形 第4巻』サクラクレパス出版部/1985年8月)  
『「原風景」としてのステレオタイプ画』(『人類の生存と美術教育』日本美術教育学会15周年記念誌/1985年6月)  
『装飾表現の系譜』(『日本美術教育学会15周年記念美術教育研究集録』日本美術教育学会/1985年3月)  
『児童の描画におけるケニアとわが国の性差傾向の類似について』(『武蔵野女子大学紀要 第20号』武蔵野女子大学文化学会/1985年3月)  
『0~3歳児の生活と造形』(『幼児の造形 第3巻』サクラクレパス出版部/1984年6月)  
『0歳児の生活、1歳児の生活』(『幼児の造形 第1巻』サクラクレパス出版部/1984年6月)  
『幼児の絵にあらわれる性差傾向3』(『美術文化5月号』美育文化協会/1984年5月)  
『幼児の絵にあらわれる性差傾向2』(『美術文化4月号』美育文化協会/1984年4月)  
『小学校児童の色彩表現における性差傾向について』(『武蔵野女子大学紀要 第19号』武蔵野女子大学文化学会/1984年3月)  
『幼児の絵にあらわれる性差傾向1』(『美術文化2月号』美育文化協会/1984年2月)  
『絵から見た男と女の脳』(新井康充著『脳から見た男と女』講談社/1983年12月)  
『女児描画の表現特性に見る源氏物語絵巻との類似について』(『日本美術教育研究紀要 第15号』(社)日本美術教育連合/1982年3月)  
『望ましい経験や活動とは』(『新保育内容講座6絵画制作・造形』光生館/1982年1月)  
『幼児の造形表現における性差傾向』(『武蔵野女子短期大学部幼児教育研究収録 第3集』武蔵野女子短期大学部幼児教育科/1981年3月)  
『女児描画の特性について』(『日本美術教育研究紀要 第14号』(社)日本美術教育連合/1981年3月)  
『造形教育論的視点における並列表現型構図の性差分析』(『武蔵野女子大学紀要 第16号』武蔵野女子大学文化学会/1981年3月)  
『幼児の造形表現におけるモチーフの性差に関する造形教育論的考察』(『武蔵野女子大学紀要 第15号』武蔵野女子大学文化学会/1980年3月)  
『幼児の装飾表現の性差に関する造形表現教育論的考察』(『美育文化10月号』美育文化協会/1979年10月)  
『幼児の色彩表現における造形教育論的考察』(『武蔵野女子大学紀要 第14号』武蔵野女子大学文化学会/1979年3月)  
『幼児の嗜好色を中心とした造形表現の性差に関する文献比較』(『幼児教育研究論集 第1集』武蔵野女子大学短期大学部幼児教育科/1979年3月)  
『幼児の絵画表現における色彩の指導』(『美術文化7月号』美育文化協会/1978年7月)  
『幼児の造形作品の見方』(長坂光彦編著『絵画制作・造形』第3章/川島書店/1977年4月)  
『5歳児の造形表現に於ける性差について』(『日本美術教育研究紀要 第6号』(社)日本美術教育連合/1976年3月)  
『モザイクタイルの壁画』(『美術文化2月号』美術文化協会/1976年2月)

雑誌：『国宝「三十六人歌集」のこ』(『母の友』2004年12月号/福音館書店)  
『自著を語る『だれが源氏物語絵巻』を描いたのか』(『東京新聞夕刊』2004年11月25日)  
『国宝絵巻を描いた女性たち』(『母の友』2004年11月号/福音館書店)  
『あの記事を再び(5)絵に見る女の子・男の子—皆本二三江さんに聞く』(『母の友』2004年3月号/福音館書店)  
『絵に見る男の子と女の子の表現嗜好』(『チャイルドヘルズ』診断と治療社/1999年9月)  
『もっと気を配りたい性の違い』(『おんかん 三期号』木下音感協会/1999年2月)  
『男の子は戦いが好き』(『おんかん 二期号』木下音感協会/1998年10月)  
『女の子の心は楽園に遊ぶ』(『おんかん 一期号』木下音感協会/1998年6月)  
『子どもの造形と性差』(『子どもの造形 vol.3』明治図書/1998年4月)

「絵にあらわれた性差」(『明るい性のはなし 第3巻』星の環会/1998年4月)  
 「お絵かきってこんなふうになっていくよ」(『あたしの赤ちゃん』主婦の友社/1997年8月)  
 「幼児画にみられる男女差」(『BRAIN MEDICAL』メディカルレビュー社/1996年9月)  
 「乳幼児の色彩表現の発達」(『ぶぶる 創刊2号』(株)ニューメディア/1991年8月)  
 「乳幼児の絵の発達」(『ぶぶる 創刊1号』(株)ニューメディア/1991年6月)  
 「絵に見る男の子・女の子」(『母の友7月号』福音館書店/1990年7月)  
 「男の子の絵・女の子の絵、違いを知って伸ばしたい」(『プチファンタン10月号』主婦と生活社/1988年10月)  
 「子どもの絵に見る性差の研究」(『婦人公論9月号 第828号』中央公論社/1984年9月)

## 定期刊行物

宮田徹也「完全円こそ人間なのだ」(『図書新聞』2017年8月12日)  
 小林照幸「心と成長映す子どもの絵」(『北海道新聞』2017年5月7日)  
 山折哲雄「引目鉤鼻から能面へ」(岩波『科学』2005年11月号)  
 山折哲雄「半歩遅れの読書術『だれが源氏物語絵巻』を描いたのか」(『日本経済新聞』2005年8月21日)  
 荷宮和子「書評『だれが源氏物語絵巻』を描いたのか」(『母の友』2005年3月号/福音館書店)  
 大熊敏之「書評『だれが源氏物語絵巻』を描いたのか」(『北海道新聞』2004年11月14日)  
 中村桂子「本と出会う『だれが源氏物語絵巻』を描いたのか」(『毎日新聞』2004年10月17日)  
 無記名「書評『だれが源氏物語絵巻』を描いたのか」(『日本経済新聞』2004年10月10日)  
 佐々木達行「児童画の名著25冊『絵が語る男女の性差』」(『美育文化』2004年3月号)  
 松代洋一「文化現象としての両性具有」(『青年心理』66/1987年11月)

(みやた てつや/嵯峨美術大学客員教授)

## スポーツ系大学におけるメディアスポーツ関連科目の編成

柴岡 信一郎 (会員、日本ウェルネススポーツ大学)

本発表では2012年に開学した新興のスポーツ系大学の教育課程におけるメディアスポーツ関連科目の編成について、その背景と特色を述べた。2018年開設の大学新学部を審査する文部科学省の大学設置・学校法人審議会に絡む動向は世論を巻き込み大きなニュースとなった。日本ウェルネススポーツ大学はこの審議会において認可答申を受け、2018年にスポーツプロモーション学部通学課程を開設する。本発表でのメディアスポーツの定義は「マスメディアにおいて報道されるスポーツ」、「マスメディアにおいて広告・宣伝のツールとして用いられるスポーツ」とした。教育課程は体系性、重層性を十分に考慮して編成した。学習成果の達成にどの科目が寄与するのかを示すことで学びの道筋が明示されるよう工夫したのである。科目は共通科目、専門基礎科目、専門専攻科目により構成し、そのうち、専門科目は概論科目(2単位、1~2年次)、特講科目(2単位、3年次)、演習科目(2単位、4年次)を組んだ。メディアスポーツの関連科目では、共通科目で「マスコミュニケーション、広告宣伝の構造とメディアを冷静に読み解くリテラシー能力を習得」。専門基礎科目で「メディアの発展とスポーツの隆盛は結び付いて同時進行してきた変遷を学ぶ。主な事例として我が国のプロ野球、実業団スポーツ等」を学ぶ。専門専攻科目で「政治、経済、文化、福祉、教育、国際問題等、スポーツ以外の分野とメディアスポーツを融合しコーディネートする能力を習得」する。これらにより、「スポーツ振興」の次世代的なキーワードである「スポーツプロモーション」に寄与すると考える。

(しばおか しんいちろう/日本ウェルネススポーツ大学)

## 音楽ビジネスの課題と展望：「間 - 共創成」に向けて

河合 明 (河合孝治、芸術メディア研究会、会員)

近代であれ、ポスト近代であれ、資本主義という消費社会の中で音楽が喚起されるという現実を受け入れざるおえないとするなら、売れるか売れないかは音楽においても重要な価値基準の一つである。特に音楽ビジネスはテクノロジーやメディアの発展とともに作曲や演奏の他、プロデュースやマネジメント、また楽器関連、教育関連、インターネット関連、そして様々なメディアミックスへと拡大し、いかに音楽で利益を生み出すかが、最大の関時である。中でも特に指摘しておきたいのは放送局系音楽出版社の存在である。

かつて、ヴァルター・ベンヤミンは『複製技術時代の芸術作品』で、「今・ここ」に存在する作品のオリジナル性はコピーによる大量生産によってその権威が失われる、それを「アウラの消滅」と述べたが、音楽は複製が容易なメディアであることを考えれば、そうしたコピー文化を最も象徴する存在と言えるのである。また造形作品のように1つの作品に何億もの値段がつくのは異なり、(作曲料や委嘱料の違いがあるにしても)有名無名に関わらず、1曲あたりの販売単価に変わりはないのである。従って、利益を生むためにはできるだけ多くの人たちに楽曲が聞かれることが必要となり、そのためのさまざまなメディア戦略が巨額の富を生むことも珍しくない。

今日ではほとんどのヒット曲は、メディアとのタイアップによって生まれているのが現状であるが、特に顕著なのは「CMでの楽曲使用」と「テレビ番組のテーマ曲」である。中でもゴールデンタイムの番組で使用されるテーマ曲はヒットする確率が高いと言える。なぜならテレビの視聴率は1%で100万人、10%なら1000万人の人々がほぼ同時に同じ楽曲が共有されることを考えると、その宣伝効果はとても大きい。特にオリンピックやサッカーの世界カップなどのイメージソングともなると一日中メディアを通じて同じ曲が何度も繰り返して放送されるのである。

つまり、「ヒットした曲が放送されるのではなく、放送することでヒットする」と言えるのである。よって、放送局は楽曲のヒット、売り上げには絶大な影響力を持っているのである。そこで、注目されるのがその放送局の子会社である放送局系音楽出版社の存在である。これによって、放送局(放送局系音楽出版社)は著作権利用者であると同時に、楽曲制作者・著作権者にもなり、「自らが所有している楽曲を自らが放送することで、自ら利益を得る」ことが可能なのである。

このような構造を自己目的化と呼ぶことにするが、この構造はあらゆる業界に存在し、方法も様々だが、その根底には、ハードやソフトを絶えずバージョンアップし、過剰な機能を付加し、できるだけ多くの人たちに製品を購入させ、消費を回転させるという今日の資本主義のシステムが存在する。もっとも自由競争が激化すればそれは弱肉強食の世界になってしまうことを考えれば、ある程度の既得権益や利権が存在する社会は致し方ないであろう。しかし、アーティストは自らが作りたいものを、なるべく他者からの制約なしに、自由に創造力を駆使して表現したいと考えるのが基本であり、また作り手も消費者にとっても、今もっとも重要なことは、必要な人に必要なだけ物や情報を届けるという過度にものを所有しない自己意識改革ではないだろうか。そのために今注目すべきは、クライアント中心主義でも、自費出版でもない、自己電子出版という第3の出版方法である。

電子自己出版には以下、ネット配信によるものと、従来の印刷本、CD、DVDをオンデマンドで提供するものに大別できる。

(1) ネット配信(電子書籍、音楽配信、映像配信など)

(2) オンデマンド出版 (印刷本、CD、DVD、オリジナルデザイン商品 etc)

代表的なサイトとして Createspace、LuLu、Smashwords、Webook、Cafepress、Zazzle など多数存在するが、従来の自費制作・自費出版のように制作者側が多額の費用をかける必要もなければ管理者にとって在庫を抱える必要もない。換言すると、自己を外界へと投企 (アップロード) し、「他者との関 (間) - 自己」のプロセスでその都度内容を更新し、自己を変化させる方法なのである。つまりその都度起きる自己了解型、自己責任型の制作方法なのである。

この方法を私は「関 (間) - 共創成」と名付けたいが、さらに強調したいのは、「すべての人間は社会的存在」であるという私たち自身の存在意義である。それを創造性の場でもっとも実感できるのがこの方法ではないかと思うのである。

(かわい あきら / 芸術メディア研究会)

## 日本文化の発祥と伝播・変容に関する一考察

### 一大和民族ユダヤ人説の謎について一

渡部 英雄 (会員、湘南工科大学)

現代の日本文化は、古代日本にきた渡来人によって様々な文化が融合された文化であろうことは推測される。日本列島の先住民は 1 万 6 千年前から住む縄文人であった。その後、3 千年位前から現在に至るまで、渡来人によって様々な文化が伝播そして変容していったと思われる。特にその渡来人の中に、日本の文化に大きく影響を与えたと思われる民族がいる。それは、中国のみならず、ユダヤ人 (古代イスラエル人) である。本研究は「大和民族ユダヤ人説」つまり、日本民族とユダヤ人が同じ祖先であったという「日ユ同祖論」について焦点をあて、日本文化にどのようにユダヤの民がかかわったのかを考察したいと思う。

日本最古と言われている書物に「古事記」と「日本書紀」がある。「日本書紀」は最古の歴史書である。そこに登場する人物で、応神天皇 (201-310) は、ほぼ確実に実在したと見られている最古の天皇である。その天皇の時代、応神 14 年 (283 年) に弓月の王「功満」が、中央アジアの弓月の国から、中国、新羅、百済を経由して、120 県の人民 (秦の民、九十二部、つまり、1 万 8 千 6 百 70 人) を引き連れてやってきたという記録が残っている。「日本書紀」より) 現在でいう移民である。彼らは秦氏と名乗った。「新撰姓氏録」より)

そして、彼らは、景教徒 (キリスト教ネストリウス派) のユダヤ民族であった。

その頃の日本の人口は約 250 万人 (A D .200 年頃の人口は 59 万人、A D .501 年頃の人口は 451 万人=大宝律令の頃) であったから、かなり多い移民人口であったと考えられる。弓月の国は 1 ~ 2 世紀に存在していた。〈中国「資治通鑑 (しじつうがん)」より〉

弓月の国は、現在キルギス共和国 (ユダヤの末裔と言われている。) の北、カザフスタン辺り、バルバシ湖の南にあった国である。彼らは、他の国々から迫害をうけて日本国にたどり着いて、応神天皇に移民の許しをうけたのである。その後、日本中に秦氏一族が広がっていった。

秦氏は最高の技術集団であり、政治や軍事にはかかわらず、織物、土木、酒造、通貨など、殖産興業に力を発揮して、先端技術で日本の国家の基盤をつくった民であった。

推古天皇の時代、聖徳太子 (厩戸王 <うまやとおう> 574-622) の摂政に秦河勝が仕えた。

平城京を作ったのも、彼らである。秦河勝は太秦に蜂岡寺 (広隆寺) を創建したことで知られている。そしてまた、蚕の社 (かいこ) の神

社として「木嶋坐天照御魂神社 (このしまにますみたま)」を創建した。この神社は景教徒 (キリスト教ネストリウス派) のユダヤ教に大きく影響を強く受けている。(注、現在、神社の説明書きに記されている) この神社には、景教で使用される洗礼池 (7 月末にみたらし祭り) がある。また、石製三柱鳥居があった。イスラエルの首都エルサレムにもこの洗礼池に似たものがある。これらの跡は、彼ら秦氏がユダヤ民族であったという根拠とされている。その他、伊勢神宮も彼らが創建しており、伊勢神宮の石灯籠には、菊の御紋とダビデの星 (六芒星) が刻まれており、それら菊の御紋とダビデの星 (六芒星) はイスラエル民族の紋章と同じである。その他、ユダヤ人が作ったであろう痕跡が日本各地に残されている。多くの秦氏はユダヤ民族と考えても良いだろう。

そして、秦氏によってもたらされた日本文化に大きな影響を与えたものが 2 つある。

日本の伝統芸能に能楽の「能」と宮内庁にある「雅楽」である。その起源が秦河勝にある。

日本の伝統芸能「能」の創始者は観阿弥、世阿弥である。

1400 年、世阿弥「花伝書」(観世流の代々伝えられてきた能楽書) に、自身を「秦元清」と本名を名乗っている。「風姿花伝」の冒頭に能楽の起源を下記のように記している。

「推古天皇の御代に、聖徳太子が秦の河勝に命じて、ひとつには天下泰平を祈るため、またひとつには世人の娯楽のため、六十六番の芸を演じさせられ、申楽と名づけたのが初めて、それ以来、歴代の作者たちが芸術的ないどりを加えて、この申楽を美化する手段とした。その後、かの河勝の子孫たちが、ずっとこの芸を継承し、春日神社や日吉神社に奉仕している。(省略) 時に応永七年 (1400 年) 四月十三日 従五位下左衛門大夫 秦 元清 (世阿弥) 書」

もう一つ現在に残る文化がある。それは「雅楽」である。「雅楽」とは 宮中や神社で演奏される音楽 (オーケストラ) である。奈良時代から今日まで 1300 年以上の間、雅楽を世襲してきた家系が東儀家 (とうぎけ) である。近年、東儀俊美氏 (1929-2011、元宮内庁楽部首席学長) が受け継いできた。現在は東儀秀樹が宮内庁で楽師として活躍している。主に雅楽は京都にある宮中、奈良の南都、天王寺・大阪の楽師の家で演奏されている。雅楽の遠祖は聖徳太子に仕えていた秦河勝である。

紀元 1 世紀から 2 世紀頃、弓月の王と共に秦氏一族が日本に渡来した頃は、もうすでにシルクロードがあり、中国北京の南に位置する「開封」はユダヤ教徒のコミュニティーがあった。ユダヤ民族は、遊牧民でもあったから、決してヨーロッパ系の民族だけではなく、東アジア系の民族も多く存在していたと言われている。

日本の彼方此方にそれを裏付けるものが数多く残されている。近年、明治期に来日したスコットランド人 (生没年不明) ニシン商人とも宣教師 (スコットランドのフリーチャーチ「自由教会」) とも言われている。ニコラス・マクラウド (ノーマン・マクラウド) が、日本と古代ユダヤとの相似性に気づき、調査を進め、世界で最初に日ユ同祖論を提唱、体系化した。1878 年 (明治 11 年) 彼の著作によって始まった。『The Epitome The Ancient History of Japan』(『日本古代史の縮図』) 長崎日の出書房、Illustrations to the epitome of the ancient history of Japan 京都) 後の 1901 年、『ユダヤ大百科事典』ニューヨーク版失われた 10 支族の項目に引用。その後、多くの研究者たちによって、日本人ユダヤ人同祖論が展開されている。その中に、イスラエル人の言語学者ヨセフ・アンデルバーク (Joseph Eidelberg 1916 - 1985) は、かなり深い研究をしている。

彼らの研究によると、天皇家の祖先は古代イスラエルの民である。今から約 2700 年前、古代イスラエル王国がアッシリアに滅びされ、エジプトから難民を引きつれたモーゼたちが、アジアの地に散っていった。その後、行方不明、歴史から忽然と消えてしまった。「失われたイスラ

エル10支族」を調査するイスラエルの『アミシャブ』(1975年設立)が世界中を回った。日本へは、アミシャブのラビ・アビファイル氏が調査に来て「これらの証拠は十分に根拠があるものであり、日本人と失われた10支族の間に何らかのつながりがあることは否定できないであろう」と結論付けている。(http://yohane.natsu.gs/0000dna2.htm)

現在日本の神社は多神教であるが、聖徳太子以前は、ユダヤ教の様に1神教だった。伊勢神宮の灯籠にある菊の御紋とダビデの星はイスラエル民族の紋章と同じ。日本語の言葉500の類似語例を上げている。など、これらの証拠について本研究では取り上げ考察した。

### 結論

日本に渡ってきた渡来人にユダヤの民がいたことは、確かである。観世流の観阿弥、世阿弥の末裔や雅楽の東儀家の子孫は、ユダヤ民族と同じ祖先を持つ人々と言えるだろう。

しかし、ヨセフ・アイデルバーグが唱えるように「大和民族はユダヤ人だった」というのは、無理がある。元々は、日本列島の先住民としての縄文人が1万6000年前より住んでいた。

最近の遺伝研究によると日本人しか持たないDタイプの核DNAの遺伝子、つまり縄文人のD遺伝子は現在の日本人に20%存在する。北はアイヌ人のD遺伝子が88%、南は沖縄人にD遺伝子が59%存在し、日本列島本州人よりD遺伝子が多くいる。ユダヤ人のみならず、徐福伝説や百済人など多くの渡来人が混合し融合して現在の日本人を作っている。日本各地の様々な文化も、元いた日本人や渡来人によって作り上げてきた習慣や風習が文化伝統として培われて来たのだろうと思う。しかしながら、日本人の規範は暗黙の内にユダヤ教の一部がしみ込んでいるのではないだろうか。モーゼの十戒は、神の考え方は違うかもしれないが、それ以外は日本人に備わっているように思う。最後にモーゼの十戒は素晴らしいので引用して終わりにしたい。

「モーゼの十戒」

- ①あなたは、わたしのほかに、何ものをも神としてはならない。
- ②あなたは、自分のために、刻んだ像をつくってはならない。
- ③あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
- ④安息日を覚えて、これを聖とせよ。
- ⑤あなたの父と母を敬え。
- ⑥あなたは、殺してはならない。
- ⑦あなたは、姦淫してはならない。
- ⑧あなたは、盗んではならない。
- ⑨あなたは、隣人について、偽証してはならない。
- ⑩あなたは、隣人の家をむさぼってはならない。

### 参考文献

- 宇治谷猛「日本書記(上)」講談社学術文庫、2016年11月  
 宇治谷猛「日本書記(下)」講談社学術文庫、2017年6月  
 小西甚一編訳「世阿弥能楽論集」たちばな出版、2004年8月  
 遠藤慶太「六国史-日本書記に始まる古代の『正史』」中公新書、2016年2月  
 水谷千秋「謎の渡来人 秦氏」文春新書、2015年4月  
 篠田謙一(編)「別冊日経サイエンス 194SCIENTIFIC AMERICAN 日本版 化石とゲノムで探る人類の起源と拡散」日経サイエンス社、2015年11月  
 坂東誠「秦氏の謎とユダヤ人渡来伝説」PHP文庫、2016年6月  
 ヨセフ・アイデルバーグ(著)、久保政有(訳)「日本書記と日本語のユダヤ起源」徳間書店、2013年7月  
 ヨセフ・アイデルバーグ(著)、中川一夫(訳)「大和民族はユダヤ人だった、イスラエルの失われた十部族」たま出版、2009年7月  
 海部毅定「元初の最高神と大和朝廷の原始」桜楓社、1988年1月  
 上田正昭「国のかたちをつくったのは誰か 渡来の古代史」角川選書、2016年4月  
 http://yohane.natsu.gs/0000dna2.htm  
 「モーゼの十戒」http://gracemission.jp/?qa\_faqs

(わたなべひでお/湘南工科大学)

## 日本の近代建築における部分保存の可能性について

小森 俊明(ゲスト発表、作曲家/現代芸術研究)

日本でポスト・モダン建築が隆盛を極めた30年前は、近現代建築のスクラップ・アンド・ビルドが進むと同時に、文化の成熟によって近代建築の保存の動きが模索された時代でもあった。そんな中で、全面的な保存が難しいケースにおいては部分保存が試みられるようになったことは、大きなトピックであろう。本発表では、現在まで続く近代建築の部分保存の手法を類型化したうえで、それらにおける諸事例を分析し、今後の部分保存の可能性を探ってみたい。

### ①日本の近代建築保存の現状について

日本で近代建築の保存が積極的に試みられるようになったのは、およそ30年前のことである。現在、東京の顔としてメディアで盛んに取り上げられ、観光スポットとしても通用している東京駅赤レンガ駅舎は、今からちょうど30年前に取り壊される計画であった。しかし、計画が発表されるやすぐに保存運動が起こり、のちに重要文化財に指定され、創建当時の姿に復元保存までなされるにいたったプロセスは、まさにこの30年間における日本の近代建築保存の歴史と時期的にきれいに重なり合う点で、極めて象徴的であると言える。このような言わば「完全保存」に対し、この30年間においては「部分保存」も行われてきた歴史がある。

部分保存は、機能上手狭になった当該建築の主要部分を残し、それ以外の部分を高層ビル、あるいは超高層ビルとして建て替えて一体化することにより、容積率を増やすことを目的として行われることが通例である。これは、建て替えと保存を折衷させた、言わば妥協策の典型的な手法として定着しているのである。

以下に、それら部分保存の手法を類型化したものを記し、それらにおける諸事例を分析する。

### ②日本の近代建築における部分保存の類型について

#### I ファサードを含む主要部分を全面保存した例

##### ●中央合同庁舎第7号館(東京)

東京の官庁建築を代表するこの建築のうち、ファサードを含む主要部分には現在文化庁が入居している。昭和初期に流行したスクラッチ・タイル張りによる、典型的な官庁建築である。超高層部のヴォリュームが巨大である為にやや威圧感がある。

##### ●JPタワー(東京)

旧建物である東京中央郵便局は吉田鉄郎の代表作であり、桂離宮に代表される日本の簡素な機能主義の伝統を発展させたところに結実したモダニズムの傑作とみなしたブルーノ・タウトにより、激賞された重要な作品である。東京駅丸の内南口に面して建ち、存在感を示していたが、郵政省の民営化に伴って発足した日本郵便株式会社により、ファサードを含む主要部分を残して超高層化された。なお、この部分の設計者はヘルムート・ヤーンである。商業施設「KITTE」となった保存部分の内部は吹き抜け空間として完全に再開発され、郵便局としての機能を追憶するよすがが払拭されてしまった。

##### ●日本橋ダイヤビルディング(東京)

旧建物は、船舶のデザインを取り入れた江戸橋倉庫ビルである。高層部は保存部分と色調を合わせており、一体感と統一感がある。

##### ●横浜第2合同庁舎(横浜)

横浜にいくつもの名建築を残した遠藤隆雄の代表作が、この官庁建築の旧建物である横浜生糸検査所である。保存部分は、横浜の近代建築における部分保存の事例によく見られる復元保存による。したがって、歴

史的な真正性を欠いている。高層部は、隣り合うエリアであるみなとみらい地区の超高層ビルと共通する白の色調となっている。

## ●横浜地方裁判所（横浜）

この建物も、保存部分は復元保存による。旧建物内にあった歴史ある旧陪審法廷は、桐蔭横浜大学に移築保存されている。復元保存部分と高層部との統一感は比較的高い。

## ●ダイビル本館（大阪）

旧建物は渡辺節の代表作であり、大正期から昭和初期にかけて建設された日本の大都市のオフィスビルの中でも最も重要な建築の一つであった。保存部分の外装におけるレンガの大部分は再利用されたものの、躯体そのものは復元による。超高層部に軽みがあり、復元保存された低層部の重厚感が際立っている。

## II ファサード等の壁面部分のみ保存した例

### ●東京銀行協会ビルディング（東京、建て替え中）

ルネサンス様式による旧建物のファサードを含む2面を外壁保存し、高層部を構築した初期の事例の一つで、1993年に竣工している。俗に「かさぶた保存」と揶揄され、賛否の分かれる事例の代表であり、高層ビルに張り付けられた外壁には違和感を覚える向きが多い。本建物は新築からまだ四半世紀も経過していないにも関わらず現在建て替え中であり、完全なスクラップ・アンド・ビルドにより、皮肉にもこの違和感は解消されることとなる。このような事例は歴史的に初めてである。

### ●損保ジャパン日本興亜横浜馬車道ビル（横浜）

外壁保存のバイオニアの事例である。保存された外壁は新築された建物のミラー・ガラスによるポスト・モダニズムの意匠と相俟って、まさにポスト・モダニズムにおける様式の引用を思わせるが、これは「オリジナル」の外壁そのものである。建物全体の一体感に加え、こうした読解の興味もあり、この建物は種々の建築賞を受賞している。この種の保存の成功例であると言える。

### ●綜通横浜ビル（横浜）

ファサードの外壁部分のみを保存した事例である。その内側は開放空間となっている。街並みにおける歴史的意匠の最低限の継承が目指された結果であろう。類似した事例は神戸にいくつか見られる。

### ●神戸地方裁判所（神戸）

明治期に建てられた赤レンガの裁判所建築が旧建物である。そのファサードのみを外壁保存している。保存部分の上部外装はハーフ・ミラー・ガラスとなっており、赤レンガの意匠を引き立てていると言える。しかし、手狭となった旧建物を完全保存し、十分な面積を持った裁判所敷地内で新館を建設することは充分可能であったはずである。

### ●海岸ビル（神戸）

一見、本稿における「ファサードを含む主要部分を全面保存した例」に分類され得るような外観を保っているが、実は保存されているのはファサードの外壁部分のみであり、その内部は開放空間となっている。しかし、旧居留地において重要な街並み構成要素として機能しており、その存在感は大きいものがある。

## III ファサード等における局所的エレメントを保存した例

### ●大手町野村ビル（東京）

旧建物の時計台を嵌め込んで保存している。しかし、その各階に位置する窓と実際に機能する各階の窓とは高さが揃っていない。超高層ビルと時計台部分は違和感なく一体化している。

### ●丸の内パークビルディング（東京）

旧建物は、隣接して建っていた丸の内八重洲ビルディングの尖塔部分を移築し、外壁の一部として嵌め込んで保存している。同じ三菱地所の建物であるがゆえに可能な手法であったと言えるが、歴史的真正性の観点からは問題を残していると言える。また、超高層部との意匠上のアンバランスさも指摘出来る。

### ●三井住友銀行京都支店（京都）

旧建物を全面建て替える最中に保存を求める声を受ける形で方針転換し、旧建物のファサード玄関部のみを外壁の一部として嵌め込んで保存した、珍しい例である。ほんの一部のみとはいえ、保存されたことには意義がある。しかし、建て替え後の建物の全体のヴォリュームに比して、保存されたファサード玄関部はかなり小さく、スケール上のバランスを欠いている。

## IV その他の例

### ●テラススクエア（東京）

千代田区に残る中規模オフィスビルである博報堂本社ビルの一部を復元保存した事例である。新築された高層部と一体化するのではなく、鋭角を伴う形で間を設けている点が極めて珍しい。この部分は、当該建物の余裕ある敷地の一部を成す公開空地の隘路的空間となっている。建築が都市化する一プロセスを見せている事例である。

### ●神戸朝日ビル（神戸）

旧神戸証券取引所のテラコッタによる外観を復元した建物である。一見したところ、本稿の「ファサードを含む主要部分を全面保存した例」に分類され得るように見えるが、実際は異なる。超高層部のアルミ・カーテンウォールの軽みと低層部の重厚感が対照的であると同時に、低層部の意匠はポスト・モダニズムにおける様式の全面的引用であるようにも読解出来る。その点で、損保ジャパン日本興亜横浜馬車道ビルとやや類似している。

### ●みなと元町駅（神戸）

阪神大震災で全壊した旧第一銀行の外壁のみを再構築し、地下鉄の出入り口として利用している、極めて特異な事例である。旧建物は辰野金吾設計による赤レンガ建築であり、旧居留地にあってランドマーク性は十分に保持されている。なお、外壁の内側は駐車場となっていたが、その後、マンションが建設されている。

## ③日本の近代建築の記憶の継承に関する新たな潮流について（番外編）

近代建築は全面保存されることが望ましいことは言うまでもない。しかし、この30年の間、どうしてもそれが難しい場合は部分保存か建て替えにより対処することが普通であった。そして、この数年の間に見られるようになった潮流に、建て替えの際に低層部と高層部あるいは超高層部を分節し、低層部に旧建物の意匠を継承する手法が挙げられる。その際、旧建物の意匠をそのまま継承するのではなく、ややデフォルメし、現代化したうえで継承するのが通例である。こうした事例はまだ数少ないが、今後増加することが予想される。

### ●東京ミッドタウン日比谷（東京、建築中）

旧建物の三信ビルディングの建て替えである。地下のアーケードは旧建物のアーチ型天井を伴うアーケードを模した意匠となる予定である。旧建物は有楽町、日比谷エリアにおいて重要な街並み景観要素を構成していたので、本来は全面保存が望ましかった事例である。

### ●阪急うめだ本店（大阪）

日本初のターミナル・デパートの建て替えである。超高層部をオフィスとしたデパートの初期の事例である。大阪駅周辺のデパートの激化する増床競争の中で建て替えられた建物の一つであり、経済論理の方が勝っている。

### ●神戸阪急ビル（神戸、計画中）

阪神大震災で倒壊した旧建物の意匠を継承するターミナルビルの計画である。旧建物は阪急神戸線の高架を跨ぐ形で構築されており、電車が通り抜けるアーチ型の「トンネル」が特徴的な意匠を形成していた一方、塔屋もランドマークとなっていた。本計画では、低層部においてこれら2つの意匠をやや小規模ながらも継承する予定である。低層部も超高層部もスリムな形態となる。

（こもり としあき／作曲家／現代芸術研究）

## 「国策から見る韓国保育の中の伝統音楽 - 幼保一体型「ヌリ課程」と韓国国立国楽院の事業を中心に - 」

山本 華子 (ゲスト発表、小田原短期大学保育学科講師)

### ■はじめに

自国の伝統音楽を発展させていくためには、幼児期から伝統文化に触れられる環境作りが望ましい。韓国では、国策として保育の中に国楽(伝統音楽)が組み込まれている。本稿では、就学前幼児の教育課程「ヌリ課程」における5領域と伝統音楽に関する記述を抜粋し検討する。さらに、韓国国立国楽院運営の幼児対象国楽プログラムを取り上げ、韓国政府が保育の中の伝統音楽に取り組む現状を明らかにする。

### ■「ヌリ課程」の中の伝統音楽

韓国で保育を担っているのは、オリニチプ(子どもの家)と幼稚園である。オリニチプは日本の保育園に当たるものだが、保険福祉部が管轄、「標準保育課程」により運営されてきた。一方、幼稚園は教育部が管轄し、「幼稚園教育課程」により運営されてきた。ところが、「ヌリ課程」の導入により、幼保一元化が推し進められた。

「ヌリ」とは韓国語で「すべての」という意味である。「ヌリ課程」の導入により、2012年に5歳児の無償化教育が始まり、2013年にはそれが3~5歳までに拡大され、2015年3月より施行されている。そして、オリニチプと幼稚園の両者は「ヌリ課程」により運営され始めた。

「ヌリ課程」(2015年2月教育部告示)の5領域(①身体運動・健康、②意思疎通、③社会関係、④芸術経験、⑤自然探求)の中で国楽に関する記述を抽出すると、下記ようになる。

- ②意思疎通 「わらべうたを聞いて理解する。」
- ③社会関係 「韓国の伝統的なものに関心を持つ。」
- ④芸術経験 (表現)「わらべうたを楽しみ歌う。」  
(鑑賞)「韓国の伝統芸術に関心を持つ。」

これを見ると、韓国の幼保一体型「ヌリ課程」は、子どもたちが「伝統的なもの」「伝統芸術」に関心を持ち、「わらべうた」を歌ったり鑑賞したりすることを推奨していることがわかる。

一方、日本でも「幼稚園教育要領」(平成29年3月文部科学省告示)が改正され、5領域(①健康、②人間関係、③環境、④言葉、⑤表現)の中の環境の記述で、平成29年から変更が加えられた部分は下記の通りである。

#### 3 内容の取扱い

(4)文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。

これによると、日本でも韓国同様「わらべうた」や「伝統的な遊び」という用語が新たに加えられたことがわかる。しかし、韓国では日本よりいち早く伝統音楽について言及されていたと言える。

### ■韓国国立国楽院の幼児対象国楽プログラム

韓国には国楽を担う国家機関として、「韓国国立国楽院」が存在する。これは日本の文化庁に相当する「文化体育観光部」の17の傘下機関の

一つである。1951年にソウル特別市に本院が設立された。その後、地方国楽院として、全羅北道南原市に国立民俗国楽院(1992年)が、全羅南道珍島郡に国立南道国楽院(2004年)が、釜山広域市釜山鎮区に国立釜山国楽院(2008年)がそれぞれ開院された。この4つの国楽院の事業のうち、幼児教育に関する国楽プログラムを概観すると、「体験プログラム」と「研修プログラム」に分けられる。体験プログラムには子どもが自ら体験できる鑑賞型と実技習得型がある。研修プログラムは教師が一定の期間、国楽の基礎を身につけるためのもので、地方国楽院では宿泊しながら集中的に学ぶことができる。

一方、ソウルの本院では、1987年より約30年間、創作国楽童謡作品公募展(国立国楽院創作国楽童謡祭より改称)が開かれ、160曲以上の「創作国楽童謡」が発表されてきた。優れた受賞作はCD化され、すでに17曲の作品が初等学校(小学校)の教科書に収録され、広く歌われている。

### ■まとめ

以上、韓国では幼保一体型「ヌリ課程」で幼児教育に国楽を取り入れることが定められすでに施行されていること、また韓国国立国楽院には幼児のための「体験プログラム」と教師のための「研修プログラム」が設けられており、「創作国楽童謡」という分野が確立されていることが確認された。一方、日本には国立国楽院に当たる国家機関がないため、国策として保育者に伝統音楽を教習してはいない。

筆者が2015年3月に韓国で科研による調査を行った際に、ソウル国楽幼稚園(ソウル特別市所在)と摩尼山幼稚園(仁川広域市江華島所在)を訪れた。前者は国楽を専門的に学ぶ中・高等学校の附属幼稚園であるため、国楽を身につけた教師が子どもたちに杖鼓を教えていた。また、後者にも伝統的な太鼓などが備えられていた。しかしながら、これはごく一部の事例に過ぎない。今後は地域や機関を限定しアンケート及び聞き取り調査などを通して、韓国の保育現場における国楽活動の実態について調査し、日本との比較研究なども行いたいと考えている。

### 参考文献

- 金奎道・澤田篤子「ヌリ課程から『楽しい生活』に至る韓国の幼保小接続 - 伝統文化・伝統音楽における指導内容と教材および学習環境を中心に - 」『洗足論叢』44、2016年2月、1-14頁。
- 東元りか・神蔵幸子「保育現場における伝統的な音楽の実践と小学校音楽科カリキュラムとの関連性について」『小田原短期大学研究紀要』45号、2015年3月、1-10頁。
- 山本華子・金奎道「韓国国立国楽院の伝統音楽普及と音楽教育の試みについて」『洗足論叢』43、2015年2月、29-43頁。
- 山本華子・金奎道「韓国地方国楽院における国楽振興の役割と実状について - 国立民俗国楽院、国立南道国楽院、国立釜山国楽院を例に」『洗足論叢』44、2016年2月、15-29頁。
- 「国家教育課程情報センター」  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.kri.org/inventoryList.do?pOrgNo=10004853>
- 「日本音楽の教育と研究をつなぐ会」幼小教育の提携チーム  
[https://tsunagu-japanesemusic.blogspot.jp/p/blog-page\\_27.html](https://tsunagu-japanesemusic.blogspot.jp/p/blog-page_27.html)

(やまもと はなこ/小田原短期大学保育学科講師)

### 訃報

11月26日の研究会でご発表された会員の齋藤恵さん(大妻女子大学教授)が、11月30日にご病気により急逝されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

以上  
(りよんうく/クロスメディア研究会代表、  
東京工芸大学芸術学部映像学科)

東部支部

## アナログメディア研究会

西村 智弘

報告と計画

### 【主催事業】

●日本映像学会第43回大会アナログメディア研究会企画「フィルム体験としての映画」

会期：6月4日(日) 10時00分～11時10分

会場：神戸大学 B-203 教室

上映作品：トニー・コンラッド『フリッカー (The Flicker)』(1966)、渡辺哲也『コーヒーを飲む』(1975)、小池照男『生態系-5- 微動石』(1988)

協力：東京造形大学 伊藤純子 小池照男

●「追悼 松本俊夫～映像作家・教育者・理論家としての松本俊夫について語る」



「2017年4月に逝去された、日本映像学会元会長の松本俊夫さんの追悼企画として、映像作家・教育者・理論家としての松本俊夫の功績や仕事について、参考上映を交えながらパネラーに語っていただきます」(チラシより)。

日時：7月16日(日) 14:45-17:00

会場：小金井市公民館貫井北分館 学習室 A+B

パネラー：伊藤高志(九州産業大学教授/実験映画作家)、黒坂圭太氏(武蔵野美術大学教授/アニメーション作家)、波多野哲朗(東京造形大学名誉教授/映像研究者)

協力：東京造形大学、ミストラルジャパン、One's Eyes Film

●「ヒカルオンナ フィルム・エクスペリション 8mmを使った映像インスタレーション展」

これまで毎年行っていた女性映像作家の特集上映「ヒカルオンナ」を、映像インスタレーションの展覧会として行う。会期中に女性作家のフィルム作品を集めた上映会を行う。

日時：2017年10月31日(日) - 11月4日(土)

会場：人形町 VISION'S

出品者：徳永彩加・横江れいな・早見紗他佳

2017年11月3日(金祝)：16:35～

「女性作家たちのフィルム上映会」

### 【協力事業】

●「アニメーション作家 黒坂圭太特集」

7月14日

『緑子/MIDORI-KO』『16mm アニメーション映画プログラム』

『幻作&新作プログラム』

7月15日

「ドローイング・アニメーション映画三部作一挙公開」

伊藤高志(実験映画作家)×黒坂圭太

会場：小金井 宮地楽器ホール 小ホール

●映像インスタレーション&ワークショップ

フィルム(8mm,16mm)で映像インスタレーションをつくるワークショップを行い、映像インスタレーションを「第29回武蔵野はらっぱ祭り」で上映、公開する。

日時：11月4日(土)、5日(日)：武蔵野公園

主催：8mmFILM 小金井街道プロジェクト

●「!8 to !!16 [exclamation-8 to exclamation-16]」

8ミリ、16ミリフィルムによる上映会。

2018年1月27日、28日

会場：イメージフォーラム3F「寺山修司」

●「帰巣譚 <映像作家福間良夫没後10年追悼映像個展>

2月3日「福間良夫8mmフィルム映像個展」特別上映作品

会場：イメージフォーラム3F「寺山修司」

2月4日「福間良夫8mmフィルム映像個展」

「PERSONAL FOCUS 東京セレクション」

会場：木乃久兵衛(キノ・キューベ)

以上

(にしむら ともひろ/アナログメディア研究会代表)

東部支部

## 映像テキスト分析研究会

藤井 仁子

すでに告知いたしましたとおり、次回研究会(2017年度第2回・通算第17回)は1月20日(土)に早稲田大学で開催されます。発表者は早川由真会員(立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専攻博士後期課程)、題目は「ジョン・ハートの受難——『10番街の殺人』の分析を中心に」です。詳細は学会ウェブサイトをご参照ください。みなさまのご来場をお待ちしています。

日本映像学会 映像テキスト分析研究会

2017年度第2回(通算第17回)研究発表会

### ■日時

2018年1月20日(土曜日)15時30分開始～18時終了予定

発表後に休憩をはさんで質疑応答あり

※発表に先立ち、13時30分より参考上映を行いません

### ■会場

早稲田大学 戸山キャンパス 36号館 2階演劇映像実習室

(283教室/定員60人)

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

最寄り駅：地下鉄東京メトロ東西線「早稲田駅」、副都心線「西早稲田駅」

交通アクセス

<https://www.waseda.jp/top/access/toyama-campus>

キャンパス案内図

[http://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2016/10/20161020toyama\\_campus\\_map.pdf](http://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2016/10/20161020toyama_campus_map.pdf)

\*スロープは上らず、スロープと工事フェンスの間の狭い通路を抜けて31号館に突きあたったところで右折し、正面の階段を上っていただくのが近道です。(あるいはスロープを上がり、31号館と33号館の間を中庭を抜けてください。)

### ■発表者

早川由真(立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専攻博士後期課程)

### ■表題・概要

ジョン・ハートの受難——『10番街の殺人』の分析を中心に

映画において画面上に映しだされる身体とは、どのような存在なのか。この大きな問題について考える手がかりとして、画面上の身体にとって生命とは何かという問題を考えてみたい。そこで本発表は、60年代から21世紀のこんにちに至るまで数々のフィルムに出演した俳優ジョン・ハートの身体イメージに着目する。彼が演じる役柄は往々にして酷い目に遭い、しばしばその命を落とすことになる。ときに陰惨、ときに滑稽、そしてときに感傷的な死にっぷりこそが、ハートの独特の身体イメージを特徴づけている。では、画面上における彼の身体は、なぜそのようなにたびたび暴力を被らなければならないのか。

本発表はまず、初期の出演作から、母国イギリスだけでなくアメリカでの活躍も目立ち始める80年代中盤までの作品のなかで重要と思われる諸作品を取りあげ、具体的な画面上の要素に着目しつつ、ハートの身体イメージが担う意味について検証する。70年代末から80年代にかけて、レーガン政権成立に至るベトナム戦争後の保守化の流れのなか、シルヴェスター・スタローンやアーノルド・シュワルツェネッガーに代表されるアクション・ヒーローたちの鍛え上げられたハードな身体が、スペクタクル化した暴力を駆使しながらハリウッドを席巻していった。だがその裏側には、画面上において自らのソフトな身体を損傷させ続けるジョン・ハートの存在があった。たとえば1979年に始まる『エイリアン』シリーズで戦う女性としてのイメージを形作るシガニー・ウィーバーの背後で、あるいは、旧来の体制の決定的な崩壊と70年代ハリウッドの作家主義的な風潮の終焉を象徴している『天国の門』(1980年)の砂埃のなかで、受難する彼の身体イメージはどのような意味をもつのか。そのことを明らかにしたうえで、初期の代表作『10番街の殺人』(1971年、リチャード・フライシャー監督)に着目し、演技をふくむハートの身体イメージの細部が示す「パッション」について、作品全体の分析を交えながら検証していく。分析を通じて、一方的に暴力をうける被害者という単純な位置づけには必ずしも還元できない、彼の独特の身体イメージが描きだされるだろう。偶然にも彼の訃報からほぼ一年後の開催となるが、何度でも画面上に蘇るハートの身体イメージを通じて、画面上の身体という不思議な存在の姿に迫りたい。

お問合せ先：

日本映像学会東部支部 映像テキスト分析研究会

代表 藤井仁子

〒162-8644 新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院

e-mail: [jinfujii\(a\)waseda.jp](mailto:jinfujii(a)waseda.jp)

本年度の研究会活動はこれで終了の予定ですが、4月以降に発表を希望される会員は引きつづき運営担当(木村建哉会員、長谷正人会員、中村秀之会員、藤井)までお届出ください。

(ふじい じんし/映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学文学学術院)

## アジア映画研究会

石坂 健治

このたび日本映像学会の研究会として認可されました「アジア映画研究会」を代表してご挨拶申し上げます。本研究会の前身は、2014年4月から2016年3月まで、国際交流基金の会議室を借りて毎月1回開催していた任意団体「アジア映画研究会」です。研究者、批評家、映画祭関係者など同好の士が集まって報告や発表を重ね、相当なハイペースで2年間を疾走したのち1年間の充電期間を設け、このたび日本映像学会の正式な研究会にグレードアップして再開の運びとなりました。

国家・民族・言語・宗教など多くのパラメーター（変数）を抱えるアジア地域で制作される映画は驚くほどバラエティに富み、絶え間ない変化を続けています。本研究会でこれまで組上に載ったテーマを列挙してみても、アピチャップン・ウィーラセタクン、リティ・パン、キム・ギヨン、ラージ・カプール、黒澤明、チャン・リュル、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン、キドラット・タヒミック、ホン・サンス、ラヴ・ディアス、『アクト・オブ・キリング』、『中国独立電影』、『アジア太平洋映画祭』、『雨傘運動』などなど、その多様さに圧倒されます。これからは様々な研究テーマを持つ会員の皆様にもご参加いただき、研究発表や上映イベントを通じて参加者相互のネットワークを構築することで、アカデミックな議論のいっそうの充実をめざしていきたいと考えています。

通常の例会は2ヶ月に1回、原則として偶数月の第1水曜日、国際交流基金アジアセンターのご協力により同センター（新宿区四谷4-16-3）にて実施します（次回は2月7日）。また半年に1回程度の公開イベントも行っていく予定です。いずれも学会事務局を通じて告知しますので、どうぞご参加ください。

(いしがけんじ/アジア映画研究会代表、日本映画大学)

## ドキュメンタリードラマ研究会

杉田 このみ

## 報告と計画について

NHK番組アーカイブス学術利用トライアル2017年度第4回に、本研究会発起人メンバーで申請したところ、採択された。これを弾みに、更なる研究の充実を図りたい。

NHK番組アーカイブス学術利用トライアルは、NHKがこれまで放送し、NHKアーカイブスで保存している番組を学術的に利用する方法を検討するプロジェクトで、2010年からスタートしている。本研究会では、下記の研究内容にて、12月〜来年2月まで、NHK放送博物館（東京都港区）にて視聴する。その後、学会発表や、研究会開催、論文執筆などを予定している。

## 研究タイトル

「ドキュメンタリードラマ」史研究

—— 概念・手法の変遷を探索し、テレビ表現の可能性を展望する

## 研究目的

「ドキュメンタリードラマ」の歴史を遡ると、テレビの草創期にその手法が模索されてきたことがわかる。NHKにおいて最初に「ドキュメンタリードラマ」を冠する番組は『ドキュメンタリードラマ「那須野の歌声」』（1958）であるが、番組名に付されていないなど手法においてそのように位置づけられる例もある。例えば『真相はこうだ』（1945）は、後世の制作者によりドキュメンタリードラマの先駆的作品として再評価されている。また、海外のテレビ局が制作した番組が日本のテレビ文化に及ぼした影響についても重要な研究課題となるだろう。本研究課題ではまず、テレビ文化史におけるドキュメンタリードラマに関する基礎資料を作成する。さらに各年代の代表的な番組を実際に視聴し、テーマ・構成・演出・手法について分析する。制作者たちがそれぞれの時代状況の中で、テレビ表現の可能性をどのように模索してきたかが浮かび上がってくる。

## 研究内容

## 1. 基礎資料の作成／アーカイブ化

NHKクロニクルや放送ライブラリー、新聞や雑誌記事、書籍、研究論文などからドキュメンタリードラマにまつわる番組タイトルのリスト化を作成中（現在まで約150番組について基本情報・概要を付し分類）。

## 2. 各年代の代表的な番組を軸に、テーマ・構成・演出・手法について分析

『明治の群像』（1976）などの大型企画や、ドキュメンタリードラマの先駆者として位置づけられる吉田直哉（1931-2008）および岡崎栄（1930-）が制作に関わった番組を主にとりあげ、基本情報の確認・作品分析を行う。さらに、彼らが関与したテレビフォーラムや回顧録などを軸にドキュメンタリードラマに関する言説史を辿り、ドキュメンタリードラマを歴史的にあとづける。海外制作のドキュメンタリードラマとの比較研究も重要な論点となる。時代を代表するドキュメンタリードラマ番組に力点を置き分析を行う。

なお、2018年2月18日（日）千葉商科大学にて、制作者を招いて、研究会を開催予定である。ぜひご参加いただきたい。

(すぎたこのみ/ドキュメンタリードラマ研究会代表、千葉商科大学)

## 映画文献資料研究会

西村 安弘

## 第44回映画文献資料研究会のお知らせ

日本映像学会映画文献資料研究会では、下記のように研究会を開催いたします。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

## 記

「轟夕紀子は新劇から何を獲得したか？」

## 第1部：参考上映

『勝利の日まで』（1945年、成瀬巳喜男監督、15分）

『人生劇場 第2部 残侠風雲篇』（1926年、佐分利信監督、110分）

## 第2部：研究発表「轟夕紀子は新劇から何を獲得したか？」

発表者：山口博哉氏（映画史家）

轟夕紀子は宝塚少女歌劇で演技の基礎を身につけましたが、そこからリアリズムを基調とする映画演技に転換することに大変苦しみました。その克服のため1943年から1953年にかけて新劇に意欲的に出演し、少女歌劇的演技からの脱却を模索しました。

その演技の転換がどのようなものであったかを検証するためには、戦争末期に出演したオールスター映画『勝利の日まで』で、少ない出番の中でどのような演技を披露したのか、また戦後の1953年に安定した映画演技を披露した『人生劇場 第2部』でどのような成果を披露したかを検証する必要があります。

この2作品を比較することで、轟夕紀子が新劇からどのような演技技術を獲得したかが明らかになるでしょう。

日時：2018年2月10日（土）13:00～16:00

会場：東京国立近代美術館フィルムセンター 試写室

(東京都中央区京橋3-7-6)

アクセスマップ：[http://www.momat.go.jp/fc/visit/information\\_map/](http://www.momat.go.jp/fc/visit/information_map/)

主催：日本映像学会映画文献資料研究会（代表：西村安弘）

参加費：無料・事前申し込み制（例会の後に、有志による懇親会を予定）

※会場準備のため、2月2日（金）までに、下記のメールアドレスに申込をお願いします。

申込：西村安弘（東京工芸大学）[nishimur@img.t-kougei.ac.jp](mailto:nishimur@img.t-kougei.ac.jp)

※当日は、12:50までに、フィルムセンター1階エントランスにご参集ください。

発表者紹介：山口博哉（やまぐち・ひろや）

1970年生まれ、大阪出身、映画史家。

17才で轟夕紀子の大ファンとなって以来、30年にわたり取材や資料収集を通じて轟の研究を続け、ライフワークとしている。次第に興味の幅を広げ、映画監督の春原政久や島耕二などの研究にも着手、日本映画史全般を専門とする。これまで1400冊の映画書、2600冊の映画雑誌を調査し、110人の映画関係者を取材。独学で映画史を学び、現在は在野の映画史家として活動。生業はヨガ・インストラクター。

轟夕紀子および日本映画史の研究についてとったノートは現在72冊目。轟夕紀子研究の成果を私家版として発表した著書は9冊、また2008年からフリーペーパー「月刊ドロキ・ユキコ」（2000部）を発行している（最新号は36号）。その他、共著として「原節子のすべて」（2012年、新潮社）があり、新聞寄稿やメディア取材など多数。

轟夕紀子生誕100年&没後50年にあたる2017年には、各種の記念イベントを主催。ラビュタ阿佐ヶ谷の轟夕紀子特集上映、兵庫県宝塚市立中央図書館の轟夕紀子展、宝塚映画祭の轟夕紀子特集上映などにも係わる。日本映像学会の映画文献資料研究会では、2008年7月12日に轟夕紀子について、2013年12月7日には春原政久について研究発表をしている。

2018年には「轟夕起子伝記」「轟夕起子フィルムグラフィック」の出版を予定。

以上

日本映像学会映画文献資料研究会

代表：西村安弘

東京都中野区本町2-9-5

東京工芸大学芸術学部映像学科内

## 映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

「映像表現研究会」報告と計画について

第11回となる<インターリンク：学生映像作品展：ISMIE (Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2017>は、11月19日(日)の京都会場を皮切りに、11月25日(土)には新たに加わった名古屋会場、12月9日(土)、10日(日)は東京会場というように3つの会場を巡回しましたので、以下に各会場の様子を報告します。

なお、今回は全国19校の映像メディア系大学及び専門学校の学生作品を、会員による推薦をもって上映しました。

<参加校> イメージフォーラム映像研究所/大阪芸術大学 芸術学部/九州産業大学 芸術学部/京都精華大学 芸術学部/久留米工業大学/尚美学園大学/情報科学芸術大学院大学/椋山女学園大学 文化情報学部/成安造形大学 造形学部/宝塚大学 東京メディア芸術学部/東京工芸大学 芸術学部/東京造形大学 造形学部 デザイン学科 映画専攻/東北芸術工科大学 映像学科/名古屋学芸大学 メディア造形学部/名古屋市立大学 芸術工学部/日本工業大学 情報工学科/日本大学 芸術学部/文教大学 メディア表現学科/北海道教育大学

<京都会場> 日程：11月19日(日)

会場：Lumen Gallery

インターリンク：学生映像作品展：ISMIE (Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2017の京都上映会を11月19日(日)に「KINO-VISION 2017」(旧「京都メディアアート週間」：会期17日～19日：会場「Lumen Gallery」)のプログラムとして実施しました。

「ISMIE2017 “各校代表作プログラム”」上映後に、参加校の推薦教員である4人の学会員(左から)「櫻井宏哉(成安造形大学)+成安造形大学の教員+宮下十有(椋山女学園大学)+大橋勝(大阪芸術大学)+伊奈新祐(京都精華大学)」によるミニトーク・セッションを行いました。



代表作と出品学生の紹介後、それぞれ今回の上映作品の印象など意見交換を行いました。

ISMIE以外のプログラムは、恒例となった日本アニメーション学会等による「ICAF2017」から「ICAF各校選抜プログラム」と「ICAF実行委員会セレクション」を上映し、ICAF実行委員会から今回の京都担当であり、映像学会会員でもある武蔵野美術大学の陣内利博会員と私が、今回のアニメーション作品の傾向などミニトーク・セッションを行いました。

また、ISMIA や ICAF と同じ



ように全国の大学・専門学校の教員推薦による学生映像作品のコンペである「ISCA(International Students Creative Award)」(大阪のナレッジキャピタル主催：関西TV主催ときの名称は、「BACA-JA」)より、昨年度の入賞作品集「ISCA2016」を上映しました。

今回、「ISMIEのプログラム」では、参加者は約50名程でした。3日間の全体では約150名程でした。ISMIE、ICAF、ISCAと3つ学生作品プログラムを組むことにより、全国の学生による短編映像作品&アニメーション作品の優秀作を一望できる良い機会となったと思いますが、学生の参加者数の減少が気になりました。

各プログラムの詳しい上映作品については、以下のホームページを参照して下さい。

< <http://www.kyoto-seika.ac.jp/kino/2017/index.html> >

(報告：伊奈新祐)

<名古屋会場> 日程：11月25日(土)

会場：愛知芸術文化センター (アーツスペースA)



名古屋会場は、11月25日(土)

愛知芸術文化センター (アーツスペースA)にて実施しました。13:30より代表作プログラムI、15:00より代表作プログラムIIを上映しました。



また、16:30～18:00まで、愛知県美術館主任学芸員の越後谷卓司氏とともに、推薦教員である伊奈新祐会員(京都精華大学)、奥野邦利会員(日本大学)、齋藤正和会員(名古屋学芸大学)、前田真二郎会員(情報科学芸術大学院大学)、そして司会として伏木啓会員(名古屋学芸大学)による公開トークが行われ、出品作品に関する所感や学生作品から見える映像表現の現状について議論が交わされました。



## 支部・研究会だより 関西支部

豊原 正智

名古屋会場は今回がはじめてでしたが、「第22回アートフィルムフェスティバル」との同時開催ということもあり、公開トークを含め延べ118名の入場者を集めることができました。

### 来場者数

- 代表作品プログラム1: 44名
- 代表作品プログラム2: 50名
- 公開トーク: 24名
- 合計数(延べ人数): 118名

### 学生スタッフ

4名(受付2名, 上映2名)

(報告: 伏木啓)

<東京会場> 日程: 12月9日(土)・10日(日)

会場: 日本大学芸術学部江古田校舎大ホール

東京会場は昨年同様に12月の開催となりました。

12/9(土)は、13:00～

16:00に各校10分以内(2作品以内)又は10分以上20分以内(1作品)で選ばれた代表作品プログラムを上映し、16:20～17:50には作品推薦教員による公開ディスカッション「RemediationとMusic Video～



ポストTV時代のMusic Videoを中心に～」を実施しました。

パネラー: 伊奈新祐(京都精華大学)、太田曜(東京造形大学)、大山麻里(日本工業大学)、川口肇(尚美学園大学)、黒岩俊哉(九州産業大学)、野村建太(日本大学) 司会: 奥野邦利(日本大学)

公開ディスカッションはパネラーの紹介と共に上映作品に対する所感を述べた後、伊奈新祐会員(映像表現研究会代表)による基調報告を行いました。それに続いて、提供された話題に沿ったパネラーによるトーク形式を取りつつ、会場より村山匡一郎会員やほしのあきら会員からの意見を得られたことも報告します。尚、公開ディスカッションの報告は次回会報にて行う予定です。



12/10(日)は、12:00～18:00に各校25分以内で推薦された全作品を、A～Dの4つのプログラムで上映しました。両日の入場者数は約150名。詳しい上映作品については以下のホームページを参照して下さい。

< [http://d.hatena.ne.jp/e\\_h\\_kenkyu/](http://d.hatena.ne.jp/e_h_kenkyu/) >

既にご案内の通り、関西支部第82回研究会が神戸芸術工科大学を当番校に、平成29年12月9日、当大学梅田サテライトオフィスにて開催されました。研究発表は以下の2件でした。

- ・「剪纸アニメーションにもたらすデジタル映像表現の可能性について」  
 神戸芸術工科大学大学院 王鍵芝 会員
- ・「日本の地域差社会における写真館の社会的役割について: 家族の記念写真を中心として」  
 大阪芸術大学 李京彦 会員

新進気鋭のお二人の発表は、映像資料を駆使し、具体的で実証的な研究の一端を発表していただき、質疑応答も活発に行われました。詳細な内容については本会報掲載の要旨をご参照ください。

12月の研究会では、引き続き支部総会が行われ、平成29年度の事業報告並びに会計報告、また平成30年度の事業計画案の提案が行われ、いずれも承認されました。終了後、発表者を変え、恒例の懇親会兼忘年会が開催されました。

次回、第83回研究会は大阪経済大学を当番校に、平成30年3月24日(土)に、また、第84回は京都大学での開催を予定しています。

夏期映画ゼミナールは毎年、京都文化博物館との共催で、9月の最初の週末の3日間で開催していますので、8月31日、9月1日、2日を予定しています。テーマ及びシンポジウムのパネリストにつきましては、2、3の候補が上がっていますが、今後検討し、大会時にはチラシにてお知らせしたいと思います。

(とよはら まさとも/関西支部担当常任理事、大阪芸術大学)

芳名帳の記載数	学生スタッフ(設営、受付、撤収)
1日目: 92名	1日目: 6名
2日目: 41名	2日目: 4名

(報告: 奥野邦利)

最後に、従来は10分以内(2作品以内)を代表作品としていましたが、今回より代表作品の傾向を広げる意図から10分以上20分以内(1作品)という選択肢を用意しました。また、代表作の中から各校の推薦教員による投票によって「ISMIE2017学生選抜作品集DVD」の作成を今後行い、次回大会にて報告を予定しています。

以上

(いな しんすけ/映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)  
 (おくのくにとし/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

## 支部・研究会だより 中部支部

伏木 啓

### 中部支部報告と計画

#### <報告>

中部支部では、2017年度の第1回研究会を09月23日(土)、第2回研究会を12月09日(土)に愛知県立芸術大学にて開催した。第1回研究会では、招待講演としてキュレーターの阿部一直氏を招き、韓国のアーティスト:ムン・キョンウォン氏とともにYCAMで進められた『プロミス・パーク・プロジェクト』の事例などを紹介いただいた。アビ・ヴァールブルグが夢想した「ムネモシュネ・アトラス」のような集合的記憶としての「未来の公園」が、アートとアーカイヴの新たな関係性を提示しているようにも思え、アートの未来のあり方をも考えさせられる刺激的な講演となった。



研究発表としては、映像作家の伊藤仁美会員より、プライベートな記憶や痕跡に纏わる自身の作品について展示風景の記録とともに発表いただいた。また、第1回研究会は「メディアアート研究会」と同時開催とし、村上泰介会員と大泉和文会員にも発表いただいた。同研究会企画による展覧会『インターフェイスとしての映像と身体』の出品作品に関するもので、村上会員は、自閉症スペクトラムの感覚体験を追体験できる装置をメディアアート作品として提示しており、それが非健常者の感覚体験というよりも「異なる世界をもつ他者を追体験する試み」であり「異なる世界の可能性へと開かれること」につながるといった説明がなされた。大泉会員は、展覧会のタイトルである『インターフェイスとしての映像と身体』より、映像そのものをインターフェイスとして再考することをきっかけとしたことが明かされ、身体性が映像に反映させる仕組みとともに、初期コンピューターアートにおいて多用されたモアレを今回の作品で敢えて扱ったことなどの説明がなされた。インターフェイスとしての映像を切り口として、20世紀の歴史への多様な眼差しがあったことを感じさせる内容であった。

第2回研究会では、招待講演(愛知県立芸術大学レジデンスアーティスト講演)として、国際的に活躍するメディアアーティストであり研究者の、ロラン・ミニョー氏とクリスタ・ソムラー氏をお招きした。



両氏の作品が、未来派やダダ、フルクサスなどで試みられていたアヴァンギャルドにつながるものであり、一方で近年注目されているバイオアートの先駆けとも感じさせる作品を1990年代にすでに試みていたことなど、メディアアート史の過去と未来を概観する充実した講演であった。

研究発表としては、石井晴雄会員より近年実践しているプロジェクトについて発表いただいた。偶然にも、ロラン・ミニョー氏とクリスタ・ソムラー氏の講演につながる内容であり、1960年代以降のカウンターカルチャーやサイバーカルチャーの思想が、現在のメディア環境下では様々な形で可能となっていることについて実例とともに紹介され、参加者との多様な議論へと繋がった。第1回、第2回研究会の概要を下記に記載しておく。

#### <第1回研究会概要>

2017年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第1回研究会

(愛知県立芸術大学 新講義棟大講義室)

日時: 2017年09月23日(土) 14:30より

#### ◎招待講演

メディアアートと公共性、アーカイヴィング ~ "Promise Park Project" の事例から

Media Art approaches commonality and Archiving - The case study of "Promise Park Project"

阿部一直氏(キュレーター)

世界のあらゆる都市に存在する「公園」。公園はなぜ作られたのか?そこは本来、何のための場所なのか?この問いの下、YCAMでは、2013年から3年にわたって、韓国のアーティスト、ムン・キョンウォンと共同で「未来の公園」を主題に「プロミス・パーク・プロジェクト」を推進してきた。最初の発端は「アートと集合知」という主題から、YCAMからムンへコラボレーションリサーチをオファーし、そこからムンが提案したテーマが「公園」である。様々な文明、文化、人類の営みが交錯し、時代を超えて維持されていく公園が、人類にとっての集合的な知の結晶であり、巨大な都市のアーカイヴであると発想したムンは、さらに近代的社会システムに則って成立している都市が、大規模な災害を経て瓦解した後の姿を想定し、プログラマー、建築家、ランドスケープデザイナー、植物学者等とともに、デジタルアーカイヴやバイオアートも含めた、近未来の公園を実践的に考察する。このレクチャーでは、プロジェクトの中でおこなってきたフィールドワークや資料調査の成果の集大成としての新作インスタレーション、パーク・アトラス(ビジュアル・アーカイヴ)、バイオワークショップなどを紹介するとともに、メディアアートと歴史性の関わりを検証的な参考事例としてプレゼンテーションする。 ※愛知県立芸術大学芸術講座との共催

#### 阿部一直氏プロフィール

フリー・キュレーター、プロデューサー

1960年長野県生まれ、東京芸術大学美術学部芸術学科卒業。

1990-2001年キャノン株式会社「アートラボ」専任キュレーター。2003年より、磯崎新設計になる山口情報芸術センター[YCAM]のチーフ・キュレーター及びアーティストティック・ディレクターとして、ディレクション/総合監修を担当。2012~16年副館長兼任。主なオリジナル企画に坂本龍一+高谷史郎「LIFE - fluid, invisible, inaudible ...」、池田亮司「testpattern」「supersymmetry」など。2006年ベルリン「transmediale award 06」国際審査員。2009年台北「台4回デジタルアートフェスティバル台北/デジタルアートアワード」国際審査員。2014年-16年文化庁芸術選奨メディア芸術部門選考審査員。2017年光州(クアンジュ)ACC Festival ゲストディレクター。

## ◎研究発表

身体の延長としての映像表現

伊藤仁美会員 (映像作家)

要旨：作品を制作・鑑賞するにあたって、個人的な体験や感覚を同一視することは困難であり、各々の感じている意識の形態は多様であると考えている。個人の眼差しから出発する映像表現の様態を自らの作品を通して紐解き、考察する。

## ◎メディアアート研究会 研究発表

共感の設計：発達障害の感覚経験とメディアテクノロジーについての考察  
村上泰介会員 (愛知淑徳大学 創造表現学部 准教授)

要旨：発達障害 (主に自閉症スペクトラム障害) は感覚の統合に問題を抱えており、健常とは異なる身体イメージを持つことが考えられる。こうした自閉症スペクトラムの身体イメージを健常が体感し理解を深めるために、筆者は自閉症スペクトラムの感覚経験をシミュレートする研究を進めている。本研究では環境の中から注意する対象を見つけることが困難な自閉症スペクトラムの感覚特性に着目し、自閉症スペクトラムの聴覚をシミュレーションする装置を制作した。自閉症スペクトラムでは左右の耳にとどく音の時間差に基づく音の空間定位の困難や、複数の音が存在する環境の中から特定の音を聴く手がかり (時間微細構造) の感度が低いなどの困難を抱えていることが報告されている。

制作した装置は、空間に存在する音声人間の耳と同じように取得するためのバイノーラルマイクを、子どもの頭ほどの大きさの球体の中に設置したもので、自由に持ち歩けるようにした。この球状の装置に接続されたヘッドフォンを装着した体験者の耳には、バイノーラルマイクからの音声が聴こえるが、バイノーラルマイクの耳の位置と向きは、体験者の耳のそれとは一致しない。こうした装置の構造によって、ヘッドフォンを装着した体験者は自身の身体から聴覚が分離したような感覚を体感できる。

制作された装置を使ってワークショップを実施し、インタビューをしたところ、体験者の多くが自他の境界が曖昧になるような感覚を経験したことがわかった。こうした感覚経験は自閉症スペクトラムの当事者研究でよく見られる現象であり、本研究により制作された装置が、自閉症スペクトラムの感覚経験を部分的に追体験させたのではないかと。また、本研究を通して、人間が世界を捉える方法について、健常とは異なった別のアプローチが存在する可能性を示せたのではないかと考える。

中心の喪失から水平の喪失へ —— インターフェイス / 現象としての映像、加速度と身体

大泉和文会員 (中京大学 工学部メディア工学科 教授)

要旨：一般に映像は実写もCGでも作者の意図に沿って編集され、時間軸を伴って観賞される作品である。コンピュータの登場は、データやシミュレーションの可視化のみならず、リアルタイムかつインタラクティブな映像生成を可能とし、メディア・アートの本流ともなった。この意味で映像は一般的にアウトプットであり、観賞者によるインプットの間で介在するのが通常のインターフェイスである。今回の展覧会テーマは「インターフェイスとしての映像」であり、映像そのものをインターフェイスとして再考することから出発した。作品では映像と観客との間に表出する「現象としての映像」を意図した。次に身体性であるが、身体を形づくる最大の枠組みの一つが重力であると思う。IGの重力が、地球の景観や動植物の形態、そして建築を初めとする人工物の構造を規定している。日常、重力を意識することは稀であるが、人間は五感のほかに加速

度を知覚するという考え方がある。作品では長さ4mのシーソー状の装置を作り、観客がその上を歩く際の傾きにより加速度の変化を誘発させた。傾きによりインタラクティブかつリアルタイムに生成する映像として、今回はモアレ現象を採用した。1960年代の初期コンピュータ・アートでは、オブアートの影響の下、プロッタ出力によるモアレ・パターンが流行した。プロジェクタの解像度の向上に伴い、2つの映像の重ね合わせでもモアレの表出が可能となった。モアレの採用理由は初期コンピュータ・アートへのオマージュと、映像メディアの高解像度化による。20世紀は美術に限らず様々な局面において「中心の喪失」が相次いだが、今世紀は基準となる水平 (垂直) 軸さえも定まらず混迷を深めている。歴史に照らし合わせれば、この状況はしばらく続くであろう。作品タイトル《Loss of Horizontality》は辞典では傾斜の意味であるが、直訳の「水平の喪失」による。

## ◎関連企画

メディアアート研究会企画 — 映像とメディアアート展

インターフェイスとしての映像と身体

概要：映像表現の役割の一つにインターフェイスとしてのアウトプットが考えられる。

メディアアート表現の現在として、7組の研究者 / アーティストの作品を展示する。

日時：2017年9月9日 (土) — 9月24日 (日)

10:30 — 16:30 月曜休館

場所：愛知県立芸術大学芸術資料館

展示作家：

村上泰介 (愛知淑徳大学創造表現学部准教授)

鈴木浩之 (金沢美術工芸大学美術科准教授) + 大木真人 (宇宙航空研究開発機構研究員)

大泉和文 (中京大学 工学部メディア工学科教授)

ロラン・ミニョノー & クリスタ・ソムラー (リンツ美術工芸大学メディア研究科教授)

伊藤明倫 (メディアアーティスト) + 高橋一成 (筑波大学研究員)

金井学 (アーティスト)

関口敦仁 (愛知県立芸術大学美術学部教授)

## ＜第2回研究会概要＞

2017年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第2回研究会

(愛知県立芸術大学 新講義棟大講義室)

日時：2017年12月09日 (土) 13:30より

## ◎招待講演 / 愛知県立芸術大学レジデンスアーティスト講演

Between audience participation and interaction: designing interactive art systems

(観客の参加とインタラクションの狭間で：インタラクティブ・アート・システムのデザイン)

ロラン・ミニョノー氏 & クリスタ・ソムラー氏 (リンツ美術工芸大学教授)

Laurent Mignonneau & Christa Sommerer 略歴

国際的に活躍するメディアアーティスト、インタラクティブアートの研究者。米国と日本で10年にわたり研究と教育を行った後、オーストラリアのリンツ美術工芸大学に教授として着任し、インタフェースカルチャー部門を開設した。二人は米国ケンブリッジのMIT CAV、米国イリノイ州シャンペインアーバナのベックマン研究所、東京のNTTインターコミュニケーションセンターの客員研究員、デンマークのオールボー大学のオベル客員教授、筑波大学の客員教授などを歴任、ロラン・ミニョ

ノ一はパリ第8大学のシャイア国際客員教授も歴任している。これまで約30のインタラクティブな作品を制作し、スペインのマドリッドで行われた2016年のARCO BEEP賞、1994年のGolden Nica Prix Ars Electronica Award、などをはじめとして数々の賞を受賞している。今年9月、愛知県立芸術大学芸術資料館にて開催した「インターフェイスとしての映像と身体」にて、[Portrait on the fry]の展示を行った。

#### ◎研究発表

三ヶ峯里山ハウス 自給自足からネットワーク、共生へ  
石井晴雄会員（愛知県立芸術大学准教授）

要旨：愛知県立芸術大学の石井研究室では2005年から大学の敷地内で農耕を始め、2007年から学生と家建て始めるなど、自給自足的な暮らしを目指した活動を始めた。そして2008年から地域の住民と自然体験のワークショップを始め、その後地域の農ある暮らしのポータルサイトを制作し、地域の住民の交流イベントを開催するなど、ネットワークや地域の交流を含めた多様な活動をしている。本発表では学内で家建てた経緯とその後の活動の推移を報告し、さらにその活動と1960年代以降のカウンターカルチャーとその後のサイバーカルチャーや共生の思想との関連について考察する。農耕や家の建設、自然体験のワークショップなどの一連の活動を始めた当時は、2006年にアル・ゴア元アメリカ合衆国副大統領の映画『不都合な真実』(原題: An Inconvenient Truth) が公開され、地球温暖化などの環境問題がクローズアップされていた。また日本においても地域の過疎や環境破壊、森林の荒廃や農、食などの様々な問題が表面化していた。また当時はインターネットが高速回線に常時接続され、スマートフォンやSNSが普及しつつあり、誰もがどこでも多様なコミュニケーションができる様になりつつあった。そして都会や屋内の環境に縛られることなく、野外や地域、社会そのものが活動のフィールドになりつつあった。一方インターネット上には複製可能で再生可能な情報が氾濫し、複製不可能なモノや、再生不可能なその時その場でしかできないコトや体験が価値を持つ時代になりつつあった。その様な時代背景の中で、環境やフィールドワーク、地域の特徴を生かしたモノやコトのデザインをテーマに、自然農による農耕や家の建築、地域の住民との自然体験のワークショップは継続された。しかし当初の自然農を中心とした自給自足的な暮らし 2011年に東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故があり、エネルギーを自給することの重要性を感じ、建てた家にソーラーパネルや風力発電機とバッテリーを備え付けて自然エネルギーの利用の実験を始めた。また震災を通して地域の住民同士の関係を作ることの必要性を感じ、地域の農ある暮らしのためのポータルサイトや地域の観光・交流のためのwebサイトを制作した。また地域の住民が集まって交流できる音楽とアートのイベントを始めるなど、当初めざした自給自足的な暮らしから、インターネットを使ったネットワークへ、そして地域住民の交流と共生をめざす方向へとテーマは推移していった。これらの推移は結果として、1960年代以降のカウンターカルチャーの時代のコミュニケーションなどが目指していた自給自足的な共生社会への理想が挫折し、若者は都市へ帰郷し、ネットワークなどのサイバーカルチャーの中で共生を目指した流れと重なるものがある。しかし1960年代のカウンターカルチャーの時代に自給自足的な共生社会の理想が挫折した背景には、それらを実現するための実際的なツールが存在しなかったことがあげられる。しかしその後Whole Earth Catalogなどの雑誌のよって様々なツールへのアクセスが可能になり、パーソナルコンピュータなどの個人の能力を拡張するツールや、パソコン通信などのネットワークのためのツールが開発されていった。そして現在ではスマートフォンやインターネット、様々なオンデマンド生産技術や自然エネルギー、電気自動車などの水平分散型の情報、生産、エネルギー関連

の技術へのアクセスが可能になり、オープンやシェア、フィードバックといったサイバーカルチャーが目指した思想が社会の中で一般化しつつある。そして現在は1960年代に夢見た共生社会を、様々な現実的なツールを獲得しながら現実社会の中で実現して行く過程なのではないだろうか。その様な問いを元に、今後も地域において実践的に研究をおこなう。

#### <計画>

2018年2月下旬～3月上旬に第3回研究会を「名古屋学芸大学」にて実施予定です。研究発表を2～3件のほか、学生作品プレゼンテーションも開催予定です。

詳細は、中部支部 Web ページをご覧ください。

<http://jasias-chubu.org/wp/>

以上

(ふしき けい / 中部支部担当常任理事、名古屋学芸大学映像メディア学科)

## information

## 学会組織活動報告

Image Arts and Sciences 181 (2018) , 20

## 支部・研究会だより

## 西部支部

黒岩 俊哉

西部支部では、2017年12月23日に支部総会、および2017年度第2回研究例会を開催いたしました。

日時：平成29年(2017)12月23日(土)15:00-17:40

会場：九州産業大学芸術学部

17号館6階601教室(デジタルラボ601)

1) 研究例会 15:00-17:00

#### ●研究発表1

「ライブ映像を素材とした地域イベントにおける情報提供について」

九州産業大学芸術学部ソーシャルデザイン学科 岩田敦之 会員

#### ●研究発表2

「実験映像 "nHr シリーズ" の足跡と考察—"nHr° 1" から "nHr° 4" まで」

九州産業大学芸術学部芸術表現学科 黒岩俊哉 会員

2) 支部総会 17:10-17:40

研究例会では「情報としての映像」の観点から、プロジェクトンマッピングを使った大規模なイベントにおける観客のサイン誘導の制作事例(岩田会員)と、「作家と作品」との視点から、作品・作家・観客の存在/不在性について、作品シリーズの変遷を紹介しながら考察いたしました(黒岩会員)。これらは今後の映像をとりまく状況や環境を理解する上でも、興味深いテキストを包含していますが、参加者からも多くの貴重な意見が出され、活発な討議がなされました。

その後の支部総会では、会計および活動報告の後、これからの活動についていくつかの計画案やアイデアを検討いたしました。ご参加いただいた会員の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

以上

(くろいわ としや / 西部支部担当常任理事、九州産業大学芸術学部)

## ショートフィルム研究会

林 緑子

2017年度、ショートフィルム研究会として下記1件を予定、また2018年度に下記4件を開催予定です。

## 開催予定の企画概要

## 第22回活動

会期名 黒坂圭太 - 不定形のドローイング

映像作品「不定形シリーズ」をめぐる対話

期 日 2018年2月18日(日) 14:00-17:30(予定)

ゲスト 黒坂圭太(アニメーション作家)、赤塚若樹(首都大学東京教授)

内 容 ライブ・ドローイング、上映、講演、交流会

会 場 シアターカフェ(〒460-0011名古屋市中区大須二丁目32-24 マエノビル2階)

定 員 20名 入場無料

企 画 林緑子

主 催 日本映像学会ショートフィルム研究会

日本映像学会研究活動助成金対象研究

概 要 作家・黒坂圭太氏の映像作品「不定形シリーズ」について、研究者・赤塚若樹氏との対談により読み解いていく。またライブ・ドローイングと関連作品上映も行う。具体的には、黒坂氏のフィルモグラフィを振り返りつつ、手法と表現、描くという行為、抽象的な映像表現など、本シリーズにまつわるさまざまな事柄について、作家と研究者の対話を通して考察する。ライブ・ドローイング+作品上映+作家と研究者の考察的対話を行うことで、抽象的な短編映像作品への理解を深める。



『山川景子は振り向かない』黒坂圭太

## 第23回活動

会期名 夜9時の映画評論—テレビ洋画劇場と映画解説者の時代

期 日 2018年4月以降

概 要 毎日のように映画番組が茶の間にぎわっていた時代。それは名だたる映画評論家たちの解説とセットだった。映画ファンたちは、放映作品のみならず、その始まりと終わりでなされる映画解説にも熱い期待を寄せていた。その意義とは何だったのか。また、批評史的にどう位置づければよいのか。解説映像とともに紐解いていきたい。

会 場 シアターカフェ(〒460-0011名古屋市中区大須二丁目32-24 マエノビル2階)

定 員 20名

企 画 澤茂仁

## 第24回活動

期 日 2018年秋以降

内 容 ジェンダーの視点から映像作品分析を行う

会 場 未定

企 画 梶川瑛里、間瀬翼、洞ヶ瀬真人

## 第25回活動

期 日 2018年秋以降

内 容 短編映像作家の上映と講演

会 場 シアターカフェ(〒460-0011名古屋市中区大須二丁目32-24 マエノビル2階)

定 員 20名

企 画 林緑子

主 旨 短編映像作家の作品上映と講演を併せて行うことで、作品視聴の理解を深める。

## 第26回活動

会期名 若手短編映像制作者交流上映会「tea time video」

期 日 2019年1月(予定)

内 容 作家プレゼンテーション、交流会、展示上映

会 場 未定

企 画 伊藤仁美

主 旨 学校や所属の枠を越え、若手短編映像制作者同士が、定期的に気軽に交流できる場を設ける。また、交流会のまとめとして、展示上映を開催し、作家と鑑賞者が、交流しつつ作品鑑賞をする場を設ける。その後、上映会や交流会以外においても、鑑賞者が作家を知る端緒として、一連の記録をまとめた冊子を広く配布する。

公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

以上

(はやし みどりこ/ショートフィルム研究会代表)

## ビデオアート研究会

瀧 健太郎

本研究会は、ビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足。第19回のビデオアート研究会では、ビデオアートの作品・作家分析にむけた文献研究を中心に研究会を開催した。詳細の報告は下記の通り。



ハルーン・ファロッキ《世界のイメージと戦争の刻印》(1988)から。(©Harun Farocki GBR) 連合軍偵察機が爆撃対象の空撮写真に、近くのアウシュヴィッツ強制収容所が映されるも軍部は気づかなかったことを示すシーン。

## 第19回ビデオアート研究会

日時: 2017年7月29日(土) 15:00-17:00

会場: 梅屋敷スタジオ

内容: ハルーン・ファロッキとモンタージュ理論

ドキュメンタリーの手法で映画やアート作品を手掛けるハルーン・ファロッキに関する研究の第二回として、今回はファロッキの作品の位置づけを更に図るため、その作品歴を映画・メディア理論などと照らし合わせながら定義を試みた。モンタージュ理論や近刊のジョルジュ・ディディ・ユベルマン「受苦の時間の再モンタージュ」ほかテキストと共に研究を進め、ファロッキ作品から《世界のイメージと戦争の刻印》(1988)《隔てられた戦争 識別+追跡》(2003)などの抜粋を紹介した。

パネリスト: 瀧健太郎(ビデオアートセンター東京/武蔵野美術大学非常勤講師/学会員) 進行: 河合政之(東京造形大学・東北芸術工科大学非常勤講師/学会員)

ジョルジュ・ディディ・ユベルマン著作「歴史の眼2 受苦の時間の再モンタージュ」(石井朗企画構成、森元庸介・松井裕美訳、ありな書房、2017年)では、その多くがファロッキに割かれており、ファロッキ初期作品《消せない火》(1969)から《眼/マシーン》(2001)などの比較的近年のインスタレーション作品に至るまでを対象に、「再モンタージュ」をキーワードに読解が試みられている。ゴダールとの比較において「両者ともにイメージの比類なき収集家・考古学者」(p.174-175)とし、ハンス・ブルーメンベルクやアビ・ヴァールブルク「図像アトラス」を引き受けてファロッキが「イメージのアトラス」(p.182)を継続し、大量虐殺といった「世界の苦痛を理解する」と結論づけられている。研究会ではユベルマンのファロッキ読解には「制度がみせようとしのないもの」を共同体に「返す」作用(p.154-157)への指摘部分もあるが、最終的にそれらが「受苦」への填補にのみ還元されると読み取れる事に関し、見落とされる部分も少なからずあるのではという懸念の意見が議論された。特に《隔てられた戦争 識別+追跡》(2003)で言及されている、監視や機械化された見ることのテーマが見受けられる後期の作品について別な切り口を想定し、次回以降の研究会の懸案事項とすることとなった。

## 今後の計画について

今後も定期的にビデオアートを学術的に研究する試みと、制作や展示現場を現地調査する形で研究会を進めてゆく。研究内容は随時参加メンバー内で話し合う。

\*ビデオアート研究会はメーリングリストで研究会の情報や資料などを共有しております。研究会参加ご希望の方は、[taki.kentarou@ebony.plala.or.jp](mailto:taki.kentarou@ebony.plala.or.jp) 瀧までご一報ください。

以上

(たき けんたろう/ビデオアート研究会代表)

中部支部

## メディアアート研究会

関口 敦仁

### 平成29年度メディアアート研究会活動報告と計画について

メディアアート研究会は今年度より具体的な活動を開始し、研究会研究発表を一回、企画展覧会を一回開催した。

#### 1、メディアアート研究会 企画展示

「映像とメディアアート展—インターフェイスとしての映像と身体」

・開催日時：2017年9月9日(土) - 9月24日(日)

10:30 - 16:30 月曜休館

会場：愛知県立芸術大学芸術資料館

・概要：映像表現の役割の一つにインターフェイスとしてのアウトプットを考え、メディアアート表現の現在として、7組の研究者/アーティストの作品を展示。

・展示作家：

村上泰介会員（愛知淑徳大学創造表現学部准教授）

鈴木浩之会員（金沢美術工芸大学美術科准教授）+大木真人（宇宙航空研究開発機構研究員）

大泉和文会員（中京大学 工学部メディア工学科教授）

ロラン・ミニョノー&クリスタ・ソムラー（リンツ美術工芸大学メディア研究科教授）

伊藤明倫会員（メディアアーティスト）+高橋一成（筑波大学研究員）

金井 学（アーティスト）

関口敦仁会員（愛知県立芸術大学美術学部教授）

●愛知県立芸大では初めてのメディアアート作品展として、資料館の屋根を塞ぎ、照明を落とした展示を行った。近年メディアインスタレーションをまとめて展示する機会は少なくなってきたので、一般の観客も含めて、新鮮で楽しんで体験する作品発表であった。



伊藤明倫+高橋一成  
SyncDon II 2015・2017  
人間の心拍同期の特性を利用した作品



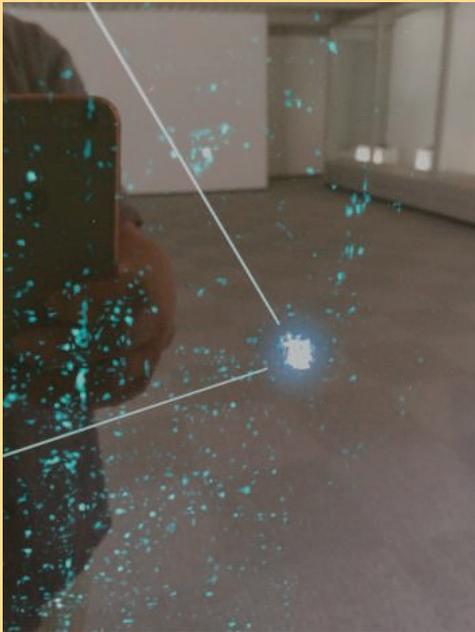
関口敦仁+片岡勲人  
La guerre- 戦争 2017  
テキストを人の動きで表示する、コンクリートポエジー作品



Laurent Minionaut & Christa Sommerer  
Portrait on the fly 2016  
人が近づくとハエがドローイングポイントされる。



大泉和文  
Loss of Horizontality 2017  
表示イメージの変化と身体知覚の関係性を問う



鈴木浩之+大木真人  
だいちの星座 - たかはら座  
2017

人工衛星との通信アンテナをドローイング装置として多人数による地上絵を描き出す作品



村上泰介  
Ear Ball for empathy 2011-2017  
表示イメージの変化と身体知覚の関係性を問う

## 2、メディアアート研究会 研究発表

2017年度日本映像学会中部支部第1回研究会と併催し、メディアアート研究会を開催し、2名の会員による研究発表を行った。

日時：2017年09月23日（土）

会場：愛知県立芸術大学 新講義棟大講義室

研究発表：

1 『共感の設計：発達障害の感覚経験とメディアテクノロジーについての考察』

村上泰介会員（愛知淑徳大学 創造表現学部 准教授）

発表者が進めている自閉症スペクトラムの感覚経験をシミュレートする研究を中心とした発表を行った。

今回展示した研究装置「Ear Ball for empathy」から得られた知見を元に、その研究方向の可能性を示した。

2 『中心の喪失から水平の喪失へ — インターフェイス / 現象としての映像, 加速度と身体』

大泉和文会員（中京大学 工学部メディア工学科 教授）

展示した作品「Loss of Horizontality」の制作研究を元に、映像と身体の新たな関係をどのように体験的に提示すべきかというアプローチから言及した。作品で映像と観客との間に表出する「現象としての映像」を意図し、身体性の知覚を意識する「水平の喪失」を作り出した。

## 3、メディアアート研究会 平成30年度活動計画

来年度も同様に、1-2回の研究会、一回の企画展示を予定している。

展示概要としては、仮題「バイオアートの現在」として、バイオアートや遺伝子情報、生体について扱う作品研究を行う研究者に展示をお願いし、映像表現の広がりやドキュメンテーション映像、シミュレーション映像の新たな扱いについて検討する機会を設ける。

展示作者については企画中。展示会場についてはあいち・アート・ラボを検討中。

研究会については、メディアアートの新たな表現についての研究を進めていく。

研究会会場は愛知県立芸術大学を予定している。それぞれの開催時期は9月、10月を予定している。

（せきぐち あつひと / メディアアート研究会代表、愛知県立芸術大学）

# 日本映像学会第44回大会 第2通信

大会実行委員会委員会

## I 大会概要

- 1、大会テーマ：「越境する映像」
- 2、会場：東京工芸大学芸術学部中野キャンパス
- 3、会期：2018年5月26日（土）、27日（日）
- 4、プログラム（予定）
  - 第1日：
    - シンポジウム「越境する映像」
    - 基調講演：波多野哲朗（東京造形大学名誉教授）
    - パネラー：伊藤高志（九州産業大学）
    - 伊奈新祐（京都精華大学）
    - 川村健一郎（立命館大学）
    - 李容旭（東京工芸大学）
    - 進行：西村安弘（東京工芸大学）
    - 懇親会（参加費 5,000円）

第2日：研究発表／作品発表  
理事会  
第45回通常総会

- 5、大会参加費
  - 会員 3,000円、一般 2,000円、学生 1,000円
  - プログラムの詳細は、大会ウェブ・サイト及び「第3通信」（5月初旬発行予定）にてお知らせします。

## II 大会参加申込書の送付

大会参加を希望される会員は、1月中旬に郵送予定の大会第2通信に同封の申込はがきの該当項目（1日目：シンポジウム／研究発表／作品発表／懇親会 2日目：総会／研究発表／作品発表）にご記入の上、切手を貼らずにご投函ください。

- ・大会参加の申込期限は、2018年4月27日（金）必着とします。

## III 研究発表／作品発表申込要領

- 1、発表の申込資格は、2017年度在籍会員に限ります。
  - 2、発表を希望される会員は、所定の申込書（1月中旬に郵送予定の大会第2通信に同封）を郵便・FAX・Eメールのいずれかの方法で、大会実行委員会（東京工芸大学芸術学部映像学科内）までお送り下さい。
    - ・発表の申込期限は、2018年2月23日（金）必着とします。
- ①郵便による申込書送付先
    - 〒164-8678
    - 東京都中野区本町 2-9-5
    - 東京工芸大学芸術学部映像学科内
    - 日本映像学会第44回大会実行委員会
  - ②FAXの送付先
    - FAX：03-5378-2837（東京工芸大学芸術学部映像学科事務局）
  - ③Eメールの送付先（大会ウェブ・サイトから申込用紙をダウンロードし、Eメールで送付する場合）
    - 大会ウェブ・サイト：<https://eizo2018.jimdo.com/>
    - 大会実行委員会メールアドレス：[jasias2018@img.t-kougei.ac.jp](mailto:jasias2018@img.t-kougei.ac.jp)

# 編集後記

総務委員会

■学会員の皆さま、新年あけましておめでとうございます。映像学会会報第181号をお届けいたします。今年が会員の皆さま、映像学会の発展の年でありますようにここに祈念いたします。（橋本）

（研究発表担当：名手久貴／作品発表担当：高山隆一）  
※1週間以内に受領確認のメールを差し上げます。

- 3、発表は、日本映像学会理事会（2018年3月17日（土）開催予定）において承認された後、大会実行委員会が正式に受理します。
  - ・必要事項の記入に不備のある申込は、無効になることがあります。
  - ・学会の趣旨にそぐわない発表、あるいは施設の関係で対応できかねる発表は、お断りすることがあります。

4、正式に受理された発表については、発表概要書式（800-1000字、MS-Wordファイル）をお送りしますので、2018年4月13日（金）までに、発表概要のご提出をお願いします。

## IV 研究発表／作品発表について

- 1、[セッション]：研究発表／作品発表の時間は25分、質疑応答は5分とします。
- 2、[使用機材]：研究発表／作品発表には、DVDやブルーレイなどのAV機器が使用できます。持参されたノートPCをAV卓に接続することは可能です（HDMI,VGA）。ただし、変換コネクタは発表者がご用意ください。上記以外の特別なメディアの場合、対応できかねることがありますので、ご承知おきください。

日本映像学会第44回大会実行委員会

委員長 李容旭（東京工芸大学芸術学部）  
委員 大津はつね（東京工芸大学芸術学部）  
委員 高山隆一（東京工芸大学芸術学部）  
委員 丁智恵（東京工芸大学芸術学部）  
委員 名手久貴（東京工芸大学芸術学部）  
委員 西村安弘（東京工芸大学芸術学部）  
委員 百東朋浩（東京工芸大学芸術学部）  
委員 山川直人（東京工芸大学芸術学部）

実行委員会事務局

〒164-8678  
東京都中野区本町 2-9-5  
東京工芸大学芸術学部映像学科内  
日本映像学会第44回大会実行委員会  
大会HP：<https://eizo2018.jimdo.com/>  
Eメール：[jasias2018@img.t-kougei.ac.jp](mailto:jasias2018@img.t-kougei.ac.jp)

会場へのアクセス

- ・地下鉄／東京メトロ丸ノ内線・都営地下鉄大江戸線－中野坂上駅（4分）下車 徒歩約7分
- ・1番出口より山手通りを初台・大橋方向に進み、成願寺を右折
- ・詳細地図  
[https://www.t-kougei.ac.jp/static/file/map\\_nakano140620.pdf](https://www.t-kougei.ac.jp/static/file/map_nakano140620.pdf)

以上